環境省 平成26年度　持続可能な地域づくりを担う人材育成事業

地域版ESD環境教育プログラム
ガイドブック

環境省

もくじ

はじめに…… 2
本書をお読みいただくにあたって…… 3

【北海道ブロック】…… 7
北海道ブロック〜持続可能な地域づくりの“肝”〜 …… 8
（北海道）カメラと探検〜探して、伝える、ぼくらの宝！〜 … 9
（北海道）水から学び、みずから考える私たちのまち … 10

【東北ブロック】…… 11
東北ブロック〜持続可能な地域づくりの“肝”〜 …… 12
（青森）森の恵みに育まれた町
〜青森ひば（ヒノキアスナロ）の一生〜 …… 13
（岩手）身近な自然と「水」と「生き物」のつながり … 14
（宮城）木のパワーを探ろう！
〜使って守る川崎の森と暮らしと未来〜 …… 15
（秋田）地球の仲間とつながろう
森の人「オランウータン」と一緒に生きる喜びを！… 16
（山形）サクラマスを育む川
〜鮭川のレシピ〜 …… 17
（福島）山と海をつなぐ川を調べ、
自然と人とのかかわりを考えよう …… 18

【関東ブロック】…… 19
関東ブロック〜持続可能な地域づくりの“肝”〜 …… 20
（茨城）なたねプロジェクト
〜タネは命の循環〜 …… 21
（栃木）ちがう国でも同じこと
〜モンゴルと日本の暮らしを比べてみよう〜 … 22
（群馬）太陽エネルギーって何だろう？
〜太陽の力でごはんができる〜 …… 23
（埼玉）ぼく、わたしはアースレンジャー …… 24
（千葉）ほんとうにきれい？
〜長南の水から考えるわたしたちの未来〜 … 25
（東京）新しいエネルギーを考えよう
〜考え、話し合い、体験し、新しいエネルギーに
ついての考えを発信する〜 …… 26
（神奈川）地球温暖化・気候変動への理解と
緩和策を考える …… 27
（新潟）通船川プロジェクト …… 28
（山梨）清里の自然（学校林）を知ろう！ …… 29
（静岡）緑のカーテンからはじめよう
〜私たちの暮らしと太陽エネルギー〜 …… 30

【中部ブロック】…… 31
中部ブロック〜持続可能な地域づくりの“肝”〜 …… 32
（富山）生活科　市電通りのたからを見つけよう …… 33
（石川）つながりに気づく、つながりを築く
〜ふるさと伏見川を守り続けるためには〜 … 34
（福井）100年後の敦賀で世界遺産候補は何か …… 35
（長野）地域の自然を見つめよう …… 36
（岐阜）人にやさしく 自然にやさしく
〜環境といのち〜 …… 37
（愛知）季節と堀川の生物 …… 38
（三重）水辺の環境調査 …… 39

【近畿ブロック】…… 41
近畿ブロック〜持続可能な地域づくりの“肝”〜 …… 42
（滋賀）見つけて、考えて、つなぐ猪子山学習 …… 43
（京都）「歩くまち京都」学習…… 44
（大阪）魚庭（なにわ）の海を知って、アマモを育てよう大作戦！… 45
（兵庫）遠阪川博士になろう！ …… 46
（奈良）佐保に生きる〜ビオトープを育てる …… 47
（和歌山）私たちのみはまの海を考える …… 48

【中国ブロック】…… 49
中国ブロック〜持続可能な地域づくりの“肝”〜 …… 50
（鳥取）里山の恵みと暮らしを伝えよう！ …… 51
（島根）昔ながらの暮らしから考える私たちの暮らし 52
（岡山）地球環境プロジェクト
〜考えよう！地球のあした、行動しよう！身近なところから〜… 53
（広島）このまちにくらしたいプロジェクト …… 54
（山口）これからのまちとくらしを考える子どもワーク
ショップ …… 55

【四国ブロック】…… 57
四国ブロック〜持続可能な地域づくりの“肝”〜 …… 58
（高知）アサギマダラの飛来する魅力ある地域づくり … 59
（香川）山・里・まちのつながりから未来を考えよう
〜善通寺弘田川調査からわかること〜 …… 60
（愛媛）よいまちつくろう 〜菜の花プロジェクト〜… 61
（徳島）暮らしの中の水を見つめ直そう
〜アフリカから学ぶ、ふるさとの安全な水と豊かさ〜 … 62

【九州ブロック】…… 63
九州ブロック〜持続可能な地域づくりの“肝”〜 …… 64
（福岡）地球救命隊
〜守れ!! 日本の森林!〜 …… 65
（佐賀）私たちの新校舎：コミュニティ・ルームをもとに
北川副町について考えよう …… 66
（長崎）環境問題と生活のつながりを知り、
科学技術で未来をひらこう！ …… 67
（熊本）くらしマイレージ講座 …… 68
（大分）校庭の木から学ぶ、木と人の暮らし …… 69
（宮崎）川から環境をかんがえよう …… 70
（鹿児島）山田クリーン作戦！
〜地域の未来のためにどんな大人になりたいですか？〜 … 71
（沖縄）伊良部　シマの自然と文化 …… 72

索引…… 73

解説【1】学びと行動変容 …… 5
解説【2】持続可能な社会づくりの構成概念
（ESDの要素）（例） …… 6
解説【3】ESDの視点に立った学習指導で
重視する能力・態度（例） …… 40
解説【4】学校における環境教育と
ESDへの取り組み …… 56
解説【5】ひとめでわかる学年別・教科別ガイド … 77

はじめに

私たちの暮らす地域社会では、自然環境の荒廃・地域活力の低下・少子高齢化・貧困・格差の拡大など様々な問題が起きています。このような問題の解決には、自ら課題を見つけ、学び、考え、客観的に判断し、他者と協力しながら課題解決に向けて行動する力が必要となります。ESD（Education for Sustainable Development；持続可能な開発のための教育）は、そういった力を身につけるための学びです。

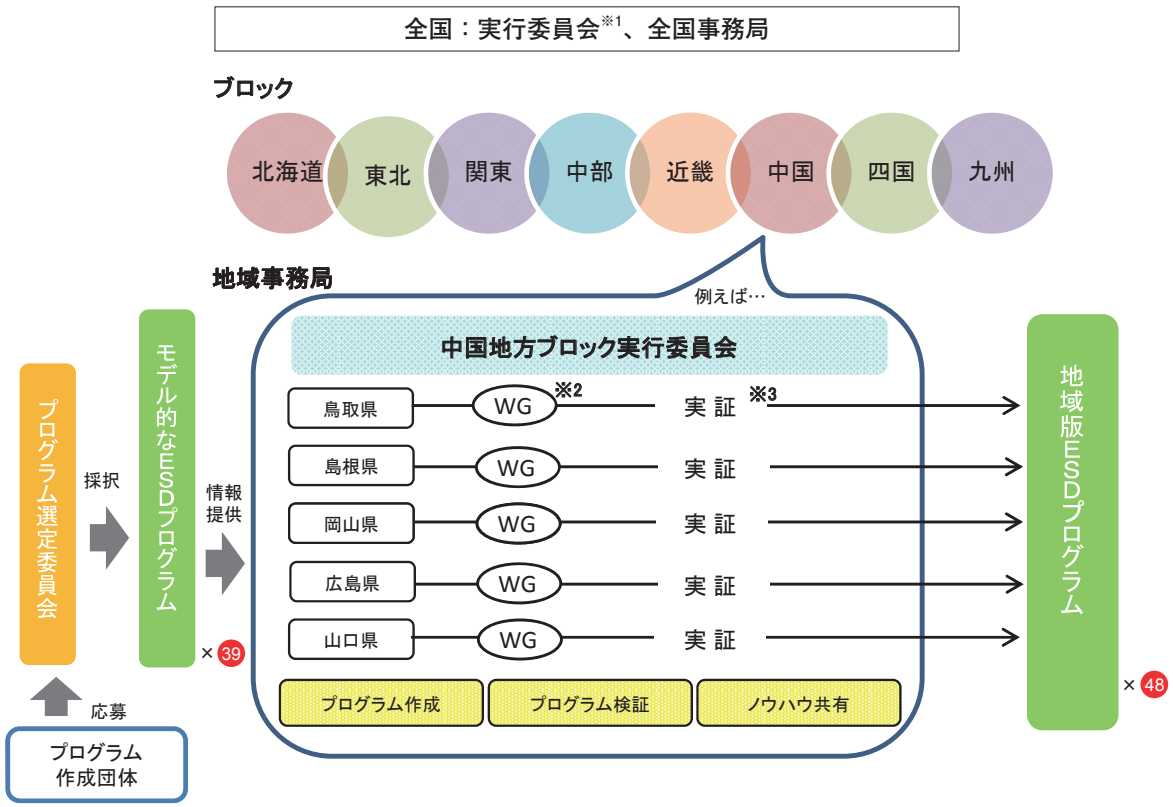
日本が提案した「国連持続可能な開発のための教育の10年（国連ESDの10年）」は2005年からスタートし、最終年である今年度（2014年）、日本で「持続可能な開発のための教育に関するユネスコ世界会議」が開催され、後継プログラムである「持続可能な開発のための教育（ESD）に関するグローバル・アクション・プログラム」（GAP）が採択されました。今後、GAPに基づき日本各地でのESD活動をより一層展開し、定着させていくことが望まれています。

環境省では、文部科学省の協力の下、「平成26年度 持続可能な地域づくりのための人材育成事業」の一環として、ESDの視点を取り入れた環境教育プログラム（以下、「モデル的なESDプログラム」）を作成し、全国47都道府県において、各地域の自然環境や歴史・文化などの特性を活かした地域版ESDプログラムへと改良しながら、学校現場等での実証事業を行いました。

本冊子は地域版ESDプログラムの概要をまとめたものであり、各プログラムの詳細をWEBに掲載しております。
こちらからご覧ください。https://edu.env.go.jp/

お読みくださったみなさまが、ESDに取り組むことに興味をお持ちになり、なにかを始めるきっかけとなれば、幸いです。

「平成26年度　持続可能な地域づくりを担う人材育成事業」事業推進体制



※1 実行委員会メンバー：石田好広、岡本弥彦、小川雅由、小澤紀美子、棚橋乾（五十音順、敬称略）

※2 本事業では、様々な主体が関わって、モデル的なESDプログラムの地域化・地域版ESDプログラム実証授業の検証などを行う円卓会議の場として、各都道府県にワーキンググループ（WG）を設置しました。学校の先生はもちろん、多様な主体を巻き込むことで、地域の人々が自らの地域の課題について考え、未来を描いていく場となることが期待されます。

※3 各都道府県にて、学校現場を中心に地域版ESDプログラムに関する実証授業を実施します。

本書をお読みいただくにあたって

本書の構成

本ガイドブックは、

1. 地域ネットワークのページ
2. プログラムのページ

の2種類のページによって構成されています。

1．地域ネットワークのページ

このページでは、全国8ブロックごとに、多様な主体がつながるネットワークの基盤がどのようにつくられたのか、またどのような方が関わっているのかを紹介しています。

8

①該当ブロック名

- 北海道、東北、関東、中部、近畿、中国、四国、九州のうち、該当するブロックを記載しています。

②ブロックの概要について

- ブロックに所属する各都道府県事務局、ワーキンググループの特徴などを記載しています。

③地域におけるESD推進体制づくりに関係する写真、イラスト、図表

④ネットワークのポイント、特徴、工夫した点

- 地域において、どのように多様な主体が関わるネットワークの基盤が構築されてきたのか、紹介しています。

⑤関係者

- ブロック実行委員会、ワーキンググループ等ESD推進に関わる方々について紹介しています。（所属は2015年3月末日現在）

⑥問い合わせ先

- 該当ブロック事業に関する問い合わせ先を記載しています。

2. プログラムのページ

このページでは、全国8ブロック47都道府県で作成された、地域版ESDプログラムの内容を紹介しています。
学習指導要領との関連など、詳細をWEBに掲載しております。

⑥持続可能な社会づくりの構成概念（ESDの要素）

●このプログラムを通して考える持続可能な社会に必要な概念をアイコンで記載しています。

- 多様性　社会は多様な事物から成り立っていること
- 相互性　社会は物や人が関わりあって成り立っていること
- 有限性　社会を成り立たせている資源やエネルギーには限りがあること
- 公平性　持続可能な社会は権利の保障や恩恵の享受が公平であること
- 連携性　持続可能な社会は、多様な主体が状況に応じて互いに協力することで構築されること
- 責任性　持続可能な社会は、一人一人が責任と義務を自覚し、行動することで構築されること

⑦ＥＳＤの視点に立った学習指導で重視する能力・態度

●このプログラムに取組むことで、身につく能力や態度をアイコンで記載しています。

- 【批判】　批判的に考える力
- 【未来】　未来像を予測して計画を立てる力
- 【多面】　多面的、総合的に考える力
- 【伝達】　コミュニケーションを行う力
- 【協力】　他者と協力する態度
- 【関連】　つながりを尊重する態度
- 【参加】　進んで参加する態度
- 【その他】その他

①該当地域名

●地域版ESDプログラムを作成・実践した地域です。

②プログラム名

●地域版ESDプログラムのタイトルです。

③対象

●プログラムの対象学年です。

④基にしたモデルプログラム名（39プログラム）

●基にしたモデルプログラム。

⑤地域版ESDプログラム化メンバー

●地域版ESDプログラム作成に関わった方々（所属は2015年3月末日現在）及び実証授業に協力頂いた学校等です。

⑧プログラムの概要

⑨プログラムの目標

⑩分野

●4つの分野「ともに生きる」「自然・生命」「ごみ・資源」「エネルギー・地球温暖化」の中の該当分野を示しています。

⑪参加者の声

●地域版ESDプログラムを体験した子どもたちや学校の先生からの一言です。

⑫プログラム展開の流れ（時数と単元名）

解説【1】学びと行動変容

小澤紀美子先生は、子ども一人ひとりの思考過程や価値観の違い、あるいは自己と環境との相互作用による変容の過程を重視し、「教育educate」の本質はもっている力を引き出すことであり、他者からの承認や自己肯定感を醸成し、「学ぶ意欲」を育むこと、環境教育の「教育」の意味は社会システムの変革の意味を包含している、という立場で「知の統合」という観点から実践・研究を進めていらっしゃいます。今回は、ESDによる学びとそれによる行動変容についてお話頂きました。

小澤　紀美子（こざわ　きみこ）

71年㈱日立製作所システム開発研究所研究員、93年東京学芸大学・同大学院研究科教授を経て、現在は、東京学芸大学名誉教授、東海大学大学院客員教授、こども環境学会会長。
専門分野は環境教育学。
社会活動では、中央環境審議会委員（環境省）、社会資本整備審議会元委員（国土交通省）、日本学術会議連携会員「環境思想・環境教育分科会」委員、中央教育審議会元委員（文部科学省）などを務める。また、国連持続可能な開発のための教育の10年円卓会議の議長を務め「ジャパンレポート」取りまとめに関わる。編著書は『これからの環境学習―まちはこどものワンダーらんど』（風土社）、『子どもの・若者の参画』（萌文社）、『児童心理学の進歩　2005年版』（金子書房）など多数。

ESDプログラム事業において、実行委員長を務めていただいている、小澤紀美子先生に、「持続可能な社会をつくる人材を育くむ学びと行動の変容」について、お話を伺いました。

― ESD的な学びとはなんでしょうか。

小澤：

ある美しい景色を見たとき、私たちは驚きや感動に出会います。驚きは興味を掘り起こし、「なぜだろう？」という疑問を生みます。疑問をきっかけに他者と対話をし、驚きや感動を共有しながら「なぜ」を問い詰めていきます。学びとはまさに「問い」なのです。知識伝達型の学習では感動や驚きは得にくいものです。経験を通じて自分の中から生まれる問いこそが「学び」なのです。

― どの様な場面に出会うことで、その「学び」は得られるのでしょうか。

小澤：

例えば、環境の問題を考えたとき、唯一の解があるわけではありません。しかし、共に生きていくためには、多様な対応が求められますので、各種代替策を考えなければなりません。それには、多様な価値観との対話が必要になってきます。つまり、学びは孤立した個人の活動ではなく、社会的な人間活動の中にあります。ただ単に知識を得るのではなく、他者との協働経験の中で対話を重ね、価値観の違いを乗り越えながら学んでいくのです。

― 学校以外にも、その「学び」の場がありそうですね。

小澤：

元来、地域にはこの学びのしくみがあります。地域での協働経験を通じて【気づき】、【調べ】、【考える】プロセスを繰り返すうちに、自分で実践出来るようになります。持続不可能な今の社会で求められているのは、このような学びのしくみを経て【行動】できる人材を育てることです。地域全体が『屋根のない学校』としての学びの場なのです。

― 効率性を重んじてきたために忘れてしまったことを、取り戻すということでしょうか。

小澤：

例えば、私たちはおいしい野菜を食べることができます。しかし、「おいしい野菜」というのは文脈から切り取られた一部です。「おいしい野菜」は、土壌の中の微生物をはじめとする様々な自然の働きがあるから育つのです。つまり、私たち人間は、自分だけで生きているのではないということです。土壌、水、植物、動物など自然の中で生き、他者と共に生かされているのです。このような「かかわり」と「つながり」を重視するアプローチがESDの重要な考え方でもあります。

― 持続可能な発展のために行動を変えるというのは他者との関わり合いから導かれるのですね。

小澤：

従来私たちは、“人間中心主義”の中で経済的・社会的に発展してきました。しかし、人間も多様な生物の一部として生き、生かされているという“生物中心主義”へ思考を転換していかなければなりません。この思考を持ちながら協働経験を通じ、他者と対話を重ね、共感するということが、自分を変容させる第一歩なのです。自らの変容があってこそ他者を変容させることができ、いずれは社会を変革させていくのではないでしょうか。

― ありがとうございました。

解説【2】持続可能な社会づくりの構成概念（ESDの要素）（例）

子どもたち自身が課題を見出し解決を考えていくESDの視点に立った学習において、「持続可能な社会づくり」を捉える要素（構成概念）を明確にしておくことが重要です。この構成概念と学習内容との関連から、子どもたちにどんな課題を見出してもらうか考えていきます。ただし、構成概念はこれらに限定されるものではありません。

①多様性

＜学習内容の例＞
- 生物は、色、形、大きさなどに違いがあること
- それぞれの地域には、地形や気象などに特色があること
- 体に必要な栄養素には、色々な種類があること

・自然・文化・社会・経済は、それぞれの形成過程で様々な様相を見せ、多種多様な事物・現象が存在しています。そうした生態学的・文化的・社会的・経済的な多様性を尊重するとともに、自然・文化・社会・経済に関わる事物・現象を多面的に見たり考えたりすることが大切です。

②相互性

＜学習内容の例＞
- 生物は、その周辺の環境と関わって生きていること
- 電気は、光、音、熱などに変えることができること
- 食料の中には外国から輸入しているものがあること

・自然・文化・社会・経済は、それぞれが互いに働き掛け合うシステムであり、それらの中では物質やエネルギー等が移動・消費されたり循環したりしています。人は、そうしたシステムとのつながりをもち、さらにその中で人と人とが互いに関わりあっていることを認識することが大切です。

③有限性

＜学習内容の例＞
- 物が水に溶ける量には限度があること
- 土地は、火山の噴火や地震によって変化すること
- 物や金銭の計画的な使い方を考えること

・自然・文化・社会・経済を成り立たせている環境要因や資源（物質やエネルギー）は有限です。このような有限の物質やエネルギーを将来世代のために有効に使用していくことが求められます。また、有限の資源に支えられている社会の発展には限界があることを認識することも大切です。

④公平性

＜学習内容の例＞
- 健康を保持するような食事・運動・休養・睡眠などが保証されていること
- 自他の権利を大切にすること
- 差別をすることなく、公正・公平に努めること

・持続可能な社会の基盤は、一人一人の良好な生活や健康が、保証・維持・増進されることです。そのためには、人権や生命が尊重され、他者を犠牲にすることなく、権利の保障や恩恵の享受が公平であることが必要で、これらは地域や国を超え、世代を渡って保持されることが大切です。

⑤連携性

＜学習内容の例＞
- 地域の人々が協力して、災害の防止に努めていること
- 謙虚な心をもち、自分と異なる意見や立場を大切にすること
- 近隣の人々との関わりを考え、自分の生活を工夫すること

・持続可能な社会の構築・維持は、多様な主体の連携・協力がなくては実現しません。意見の異なる場合や利害の対立する場合などにおいても、その状況にしたがって順応したり、寛容な態度で調和を図ったりしながら、互いに協力して問題を解決していくことが大切です。

⑥責任性

＜学習内容の例＞
- 我が国が、国際社会の中で重要な役割を果たしてきたこと
- 働くことの大切さを知り、進んでみんなのために働くこと
- 家庭で自分の分担する仕事ができること

・持続可能な社会を構築するためには、一人一人がその責任と義務を自覚し、他人任せにするのではなく、自ら進んで行動することが必要です。そのためには、現状を合理的・客観的に把握した上で意思決定し、望ましい将来像に対する責任あるビジョンをもつことが大切です。

国立教育政策研究所　教育課程研究センター
「ESDの学習指導過程を構想し展開するために必要な枠組み」より

北海道ブロック

キトウシ森林公園（東川町）

北海道のほぼ中央に位置し、豊かな自然に恵まれた東川町は1985年、写真と世界の人々を繋ぐことを目的とした、「写真の町」宣言を行いました。写真文化による町づくりや生活づくり、そして人づくりを進めています。

北海道ブロック

持続可能な地域づくりの“肝”

～地域で継続的にESDをすすめていくためには～

北海道ブロックの概要

「北海道の地域特性をふまえたプログラム」

北海道においてESDの視点を取り入れた環境教育を推進するために、ESDに係る有識者・学識経験者および実証校ごとに設けたワーキンググループ代表からなるESD環境教育推進委員会を設け、北海道の地域特性を踏まえたESD環境教育プログラムを作成しました。

ネットワークのポイント、特徴、工夫した点

「学校と地域資源をつなぐ」

実証校ごとに担任の先生、コーディネーターからなるワーキンググループを設けました。プログラムの実証では、コーディネーターが学校と地域資源（フィールド管理者、地域の企業、NPO、研究機関など）のつなぎ役を果たしました。ワークショップは、主に実証授業に関わった小学校の先生、教育委員会や地域の関係者に参加いただき、実証授業のふりかえりや小学校と地域の連携について意見交換を行いました。これにより、学校と地域の理解が一層深まりました。

推進委員会が作成した2つの北海道版ESD環境教育プログラムはパンフレットに取りまとめ、北海道教育委員会および札幌市教育委員会の協力により、北海道内の全公立小学校に送付することができました。

地方事務局

環境省北海道環境パートナーシップオフィス（EPO北海道）

推進委員メンバー

ブロック推進委員

所属	氏名
北海道教育大学教育学部札幌校	今　尚之
ソーシャルベンチャーあんじょう家本舗	松田　剛史
丸山環境教育事務所	丸山　博子
東川町教育委員会	佐藤　拓
公益財団法人 北海道環境財団	山本　泰志

地域事務局

団体名
公益財団法人北海道環境財団
東川町教育委員会

ワーキンググループ

団体名
公益財団法人北海道環境財団
札幌市立清田小学校
東川町教育委員会
東川町立東川第二小学校

問い合わせ先

環境省北海道環境パートナーシップオフィス（EPO北海道）
〒060-0042　札幌市中央区大通西5丁目11番地 大五ビル7階
TEL.011-596-0921 / FAX.011-596-0931
E-mail：epoh-webadmin@epohok.jp

北海道

カメラと探検 ～探して、伝える、ぼくらの宝！～

基にしたモデル的なプログラム：里山たんけん隊
作成団体：特定非営利活動法人きんたろう倶楽部
地域プログラム化メンバー：北海道ブロック　平成26年度持続可能な地域づくりを担う人材育成事業に係るESD環境教育推進委員会
実証協力校等：東川町立東川第二小学校

ESDの要素　多様性　有限性　連携性

能力／態度　伝達　関連

プログラムの概要

北国の身近な自然の豊かさや、そうした自然が人々の営みと多様な関わりを持っていることを、過去の写真や地域の人々の話などを通じて理解する。そして実際に、身近にある地域の自然を探検・撮影し、写真や撮影した思いを他の児童と共有するなかで、地域の大切なものについて考える。撮影した写真を用いて、地域の人々や未来の世代に向けて、自分たちの残したいものを地域の宝として発信・共有する。

なお、本プログラムでは写真撮影に必要な能力や、「記録として残る」という写真そのものの特性を効果的に活用して、観察力・表現力・伝達力・受信力を育む。さらに、プログラム全体を保護者や地縁団体、市民団体等と交流、協働して取り組むことで、自分たち自身が地域の伝承者になれることに気づくように促す。

プログラムの目標

①地域の自然環境を未来に受け継いでいく。
②身近な自然から自分が大切にしたいものを見つけ、表現し、共有することを通じて、地域の自然環境と人の関わりを大切にする態度を養う。

①カメラを持って地域の森林公園を探検
②協力して発表の準備
③撮影した写真を用い、思いを発表

プログラムの流れ

1・2時間目
　身近な自然の成り立ちと人々の関わりを知ろう
3時間目
　探検の準備をしよう
4～6時間目
　探検して、自分の宝ものをさがそう
7・8時間目
　見つけた宝ものを共有しよう
9・10時間目
　発表のための資料をつくろう
11・12時間目
　地域の人たちと宝ものについて話しあおう

参加者の声

・普段遊んでいる場所も、テーマを持って写すと気づきが増えてもっと撮りたくなった。
・昔より良くなった面もあれば、損なわれた面もあることに気づき、今以上に地域の自然を大事にしようという気持ちになった。

北海道

水から学び、みずから考える私たちのまち

基にしたモデル的なプログラム：さまざまな視点から水について考えよう　～水の総合学習プログラム～
作成団体：教育開発研究会
地域プログラム化メンバー：北海道ブロック　平成26年度持続可能な地域づくりを担う人材育成事業に係る
ESD環境教育推進委員会
実証協力校等：札幌市立清田小学校

ESDの要素　相互性　有限性　連携性

能力／態度　批判　未来　多面

プログラムの概要

北海道や地球上の水資源の利用状況などを踏まえ、産業や歴史などを通じて地域の水資源について学ぶ。さらに体験や対話などを通じて、私たちの生活や産業には水資源が不可欠であることや、使うことができる水は有限で、世界的には希少であることに気づく。

次に地域の水環境を支える様々な人の取り組みや思いを聞き、自然環境が持つ機能を調べることで、自分たちが住んでいる地域の生活や産業と水の関わりを再確認し、学んだことを協力してまとめる。

最後に、自分たちが住んでいる地域の将来の水環境をみつめ、できることを計画し、小学校の他の学年や地域の関係者に対して発信する活動を行う。

①森林の水源涵養機能について学ぶ
②私たちが使える水の希少性について体感
③学んだことをまとめ、発表

プログラムの目標

①地域の水資源の保全に取り組むために、児童が、北海道は水と関わりの深い地域であることを知る。

②水についてさまざまな観点から理解を進め、関わり方を見直し、自分たちでこれから取り組むべきことを考え、計画する能力・態度の育成を目指す。

プログラムの流れ

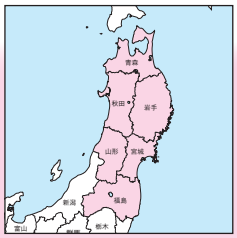
1・2時間目
地域と水の関わりについて情報を共有しよう
3時間目
私たちが「使う」水について考えよう
4～7時間目
水とのつきあい方を考えよう
8～10時間目
取り組んだことや考えたことをまとめよう
11・12時間目
まとめたことを発表しよう

参加者の声

・飲料メーカーがあるくらい、この地域が水に恵まれていることが分かった。
・「緑のダム」が身近にあることに驚いた。森林と土を守ることが大切だと思った。
・温暖化防止も水を守ることにつながることに気づいた。

東北ブロック

東北ブロックの各県は、冬場は厳しい気候にさらされる地域が多いです。でもそうした地域だからこそ、住民同士の結びつきは強く、学ぶべき昔ながらの生活の知恵や伝統がたくさんあるのです。



東北ブロック

持続可能な地域づくりの“肝”

～地域で継続的にESDをすすめていくためには～

東北ブロックの概要

「地元の価値の再発見」

東北ブロックのESD環境教育プログラムは、地域を見直し、地元の子どもたちに地元の資源や歴史・伝統を教え理解してもらうことで、地域の価値を再認識することに重点を置いたプログラムが多いのが特徴です。

①プログラム発表会でのパネルディスカッション
②運営調整会議
③岩手県・大槌町での策定委員会
④岩手県・大槌町に続く県道

ネットワークのポイント、特徴、工夫した点

「地元NPOなどとの連携」

東北ブロックは昨年同様、各県に有識者・教育者等の策定委員会を組織し、地域に根差して環境教育を行うNPOなどのパートナー団体と連携してプログラムを作成しました。全体の方向性を確認する運営調整会議も各県パートナー団体の中心となる方々で構成しています。

地域で生きた環境教育を行うには地元の教育者や教育機関との連携が有効ですが、実質４ヶ月足らずの事業期間の中で教育機関と関係を築くのは不可能であり、長年地域で環境教育を行ってきたパートナー団体の存在が不可欠でした。地域でESDを推進していくには、こうしたコーディネーター的な存在と教育現場をいかに結び付けられるかがカギとなります。

地方事務局

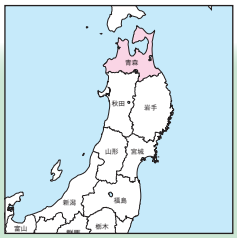
公益財団法人 みやぎ・環境とくらし・ネットワーク（MELON）

運営調整会議委員

所属	役職	氏名
NPO法人かなぎ元気倶楽部	常務理事	斎藤真紀子
NPO法人環境パートナーシップいわて	副代表理事	佐々木明宏
NPO法人まなびのたねネットワーク	代表理事	伊勢みゆき
一般社団法人あきた地球環境会議	理事・事務局長	福岡真理子
カワラバン	代表	菅原　正徳
NPO法人いわきの森に親しむ会		橋本　孝一

問い合わせ先

東北環境パートナーシップオフィス（EPO東北）
〒980-0014　宮城県仙台市青葉区本町3-2-23　仙台第2合同庁舎1F
TEL.022-290-7179 / FAX.022-290-7181
E-Mail　info@epo-tohoku.jp



青森県

森の恵みに育まれた町

～青森ひば（ヒノキアスナロ）の一生～

基にしたモデル的なプログラム：里山たんけん隊
作成団体：特定非営利活動法人きんたろう倶楽部
実証協力校等：五所川原市立金木小学校、五所川原市立金木中学校、青森県立金木高等学校
実証団体：NPO法人かなぎ元気倶楽部

ESDの要素　多様性　相互性　連携性

能力／態度　未来　伝達　協力

プログラムの概要

古くから日本三大美林と称えられ、地域の経済文化を支えた「青森ひば」（ヒノキアスナロ）は、氷河期から生き延びた特異な生態と比類ない防虫抗菌性によって平泉中尊寺金色堂をはじめ北日本各地の歴史的建造物に重用されている。私たちの町「金木町」の地名も木材の恵みに由来するとされ、明治時代には日本初の津軽森林鉄道が開通し、北辺の地でありながらハイカラな色彩が濃い土地柄でもある。青森県の木「青森ひば」と、今はなき近代化遺産「津軽森林鉄道」の歴史を知ることで地域の誇りを思い起こし、身近な里山の自然に育まれた私たちの生活環境を守るとともに、木の成長と活用から学ぶ持続可能な地域社会を未来の世代につなぐ取組を行う。

プログラムの目標

①里山の自然や歴史、生活文化等を学び、体験することによって自分たちでもできる保全活動への関心を広げる。
②地域関係団体等の協力の基に、交流や協働作業を通してコミュニケーション力や、自然環境に親しむ意欲や態度を育む。

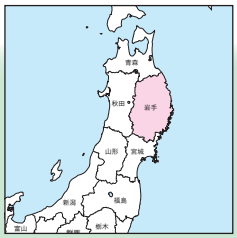
①トレイルガイドの解説を受け草木の観察
②ひば林散策
③地域の有識者からひばの歴史を学ぶ

プログラムの流れ

1・2時間目
青森ひばの歴史と現状を知る
3・4時間目
里山探検！
5・6時間目
ものづくり体験から地場産業の創造を考える
7時間目
環境保全について考える
8・9時間目
地域関係団体等と維持管理について考え、実際に対策を実施する

参加者の声

・今まで知らなかったひばの木が、本当に昔から使われているんだということを知って、驚きや嬉しさを感じました。
・今までは、生まれて、住んでいるだけの感覚だったけど、今日話を聞いてみて、歩いてみて、自分の目で見てみて、知らなかったことを勉強できて良かったです。金木町も、ひばも、スゴイと思った。



岩手県

身近な自然と「水」と「生き物」のつながり

基にしたモデル的なプログラム：身近な自然と「水」と「生き物」のつながり
作成団体：特定非営利活動法人くすの木自然館
実証協力校等：大槌放課後児童クラブ
実証団体：NPO法人環境パートナーシップいわて

ESDの要素　多様性　有限性　連携性

能力／態度　未来　多面　伝達　協力　関連

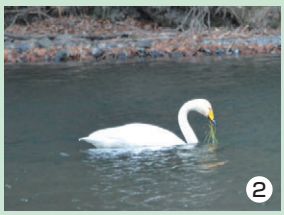
プログラムの概要

地域の身近な生き物を探し、地域の生態系の中でどのように生活しているかを知る。その生き物に、人間が使う「水」がどのような影響を与えるかを考え、生き物や湧水と地域との関係を学ぶ。

プログラムのまとめとして、実際に生息している生き物を見た後で、自分たちが理想とする地域の自然環境を想像し、地域の将来像を考えるためのきっかけづくりとして、その実現の為にできることを考える。また、学んだことを次の学年に伝えることで、地域のよりよい環境を作り上げていく活動を継続的に行っていくことができる。

プログラムの目標

①多様な生物たちが生息する自然環境に気づき、生き物のつながりを考える。
②地域の水環境にどのような生物がいるかを知り、自分たちの生活に欠かせない「水」が生物にどのような影響を与えているかを考える。
③水の流れを知ることによって、自然環境を「点」ではなく、流域という「面」でとらえることができる。
④地域の自然に関する課題を発見し、それを解決するための意欲や実践する力を身につける。



①有識者の説明を受け川で生き物観察
②ハクチョウ
③カードを使って生き物と環境の関連性を考える

参加者の声

・自然観察会をつづけてほしい。
・バイカモは、昔は、普通にどこにでもあったが、団地ができてからなくなった。湧水があって、イトヨもいる自然は残したい。
・震災後、自然を大切にしなくなった。理科クラブというのがなくなっている。

プログラムの流れ

1・2時間目
食と生態系理解プログラム［つかむ］［多面］
3～8時間目
身近な生き物マップ作り［調べる］［深める］
9・10時間目
生き物と水のつながりを考える
11・12時間目
地域の環境を未来により良い形で残すために自分たちの活動計画を立てる

宮城県

木のパワーを探ろう!

～使って守る川崎の森と暮らしと未来～

基にしたモデル的なプログラム：木のパワーを探ろう！～使って守る森と住まい・まちの創造人材育成～
作成団体：一般社団法人　日本建築学会
実証協力校等：川崎町立川崎小学校
実証団体：NPO法人まなびのたねネットワーク

ESDの要素　多様性　相互性　連携性

能力／態度　多面　協力　参加

プログラムの概要

川崎町の地域資源は何と言っても森林である。しかし、子ども達にとって森林は身近でありながらも、親しむことは少ない。また、環境を維持するために「木を伐採してはいけない」と多くの子ども達（教員や保護者など大人も同様）が思い込んでいる。そこで、身近な「木」を題材として、森林や木材の役割や木の活用方法、木を扱う産業等について、座学、炭焼き体験見学、地元の環境NPOの方の講話を通して学び、100年後にも川崎町の森林を維持するために自分達にできることを考える。

プログラムの目標

川崎町の資源である森林を題材に、木の伐採について正しい知識を得ると共に、
①居住・周辺環境（身近な生活に関わる部分）
②地域環境（地域の自然の保全や産業に関わる部分）
③地球環境（自然エネルギーや自然災害に関わる部分）
の3つに分けて考え、それぞれの環境に対する木の影響や役割について知り、自分達でできることを考え生活に取り入れる意識を持つ。

①みんなで炭ひろい
②白炭が焼ける様子を見学
③地元の方から木を活用して守ることを学ぶ

プログラムの流れ

1時間目
身近にある森林を見つめてみよう［つかむ］
○木のくらしについて話し合い木が身近なものであることに気づく
○川崎町の森林や川について興味を持ち、学習に対する意欲を持つ

2時間目
学習課題について調べよう［調べる］
○学習課題①について、グループ内で協力し合って調べる

3時間目
○「川崎町の資源をいかす会」の存在を知り、活動内容に興味関心を持つ

4時間目～7時間目
○川崎町の森林と木の活用方法について知る
○川崎町資源をいかす会の活動について知る

8・9時間目
［まとめる］
○学習課題に対し、分かったこと、自分達ができることをまとめる

学習課題
100年後、川崎町の美しく豊かな自然をずっと守り続けるために、私たちにできることを考えよう
①川崎町の森林や川の活用方法や保護活動について調べる
②自分たちにできることを考える

参加者の声

・木の種類や炭の作り方などいろいろなことが学べた。炭焼きの人達は毎年炭を作っていてすごかった。また見学に来たいです。
・木を切るのは環境のためだと知った。山の木をすべて切って生まれかわるというのがすごいと思った。

秋田県

地球の仲間とつながろう　森の人「オランウータン」と一緒に生きる喜びを！

基にしたモデル的なプログラム：地球の仲間たちの声をきこう！
作成団体：アイシン精機株式会社
実証協力校等：秋田県大仙市立清水小学校
実証団体：一般社団法人あきた地球環境会議

ESDの要素　相互性　有限性　責任性

能力／態度　多面　伝達　協力

プログラムの概要

21世紀に入ってもなお、世界では自然環境の荒廃、地球温暖化による異常気象、生態系破壊等の様々な問題が存在する。この多様な問題の解決には、自ら課題を見つけ、学び、考え、客観的に判断し、協力しながら行動する力が必要である。本プログラムでは、世界中で拡大している森林伐採等の環境破壊で影響を受けている生物の中から、絶滅危惧種のオランウータンを題材に、人間と生き物の関係を理解し、持続可能な社会はどうすれば実現できるのかを学ぶ。海外の環境問題に対し、日本にいる自分たちができる事や、豊かな自然と生き物を守る為の仕組みの構築を考える内容とし、将来目指すべき地球の姿や社会の実現に向け、主体的に取り組む力を習得する。

プログラムの目標

①人間の日常の暮らしは、あらゆる生き物と共存していることに気付き、その生き物の立場になって考えることで「命の大切さ」を学ぶ。
②世界中で人間が引き起こしている環境破壊による絶滅危惧種の存在を題材に、その要因や各問題を多面的に理解する。
③世界に目を向け、人間と生き物が平和に暮らすためには、何が問題か、何が大切かを整理し見直すことで、今後の環境に配慮した持続可能な社会の在り方を考え、問題を解決しようとする人材の育成を目指す。
④参加児童がプログラムの成果を、家族や地域と共有することで、持続可能な地域社会の形成や継続的な環境保全に向けた一歩を踏み出す。

①

②

③

①動物園で絶滅危惧種について学ぶ
②カードゲームで動物と人間の関係を学ぶ①
③カードゲームで動物と人間の関係を学ぶ②

プログラムの流れ

1・2時間目
ゲームを通じて、動物の気持ちになってみよう(シンパシーワークショップ)
3・4時間目
世界でおこっている現実　絶滅危惧種・オランウータンが教えてくれること
5・6時間目
パーム油を通して社会のルールを考えてみよう
7・8時間目
地球の仲間たちの声を聞こう！

参加者の声

・今、絶滅危惧種となっている生き物は、昔たくさんいたのに、いつのまにかいなくなっていることを知り驚きました。また、世界の人々が絶滅しそうな動物を保護しているということも学び、ぼくもやってみたいという気持ちになりました。特に、イヌワシを見てそう思いました。動物を良く知るということから始めたいです。

山形県

サクラマスを育む川

～鮭川のレシピ～

基にしたモデル的なプログラム：身近な自然と「水」と「生き物」のつながり
作成団体：特定非営利活動法人くすの木自然館
実証協力校等：鮭川村中央公民館、鮭川村立鮭川小学校、他
実証団体：カワラバン

ESDの要素　多様性　連携性

能力／態度　未来　多面

プログラムの概要

サクラマスは生まれた後およそ一年川で暮らすが、その間の環境により海へと降るサクラマスと川に残留するヤマメに分かれる。成育には豊かな河川環境と海との連続性が不可欠であることから、地域の自然環境を図る指標とされているが、近年徐々に数を減らし環境省の準絶滅危惧種に指定された。山形県では県魚として親しまれてきたが、様々な要因により資源量が減少しており、行政等による対策もはじまっている。

本プログラムではサクラマスの生態を学習し、地域に古くから伝わる川魚料理に触れることで、その価値を理解し、個人や地域レベルで保全に向けた取組みを実践できる人材育成を目指す。

①有識者からサクラマスの生態と地域の環境を学ぶ
②貴重なサクラマス
③郷土料理を食して地域の文化と価値を知る

プログラムの目標

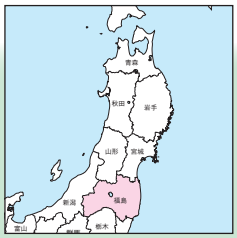
①サクラマスとヤマメの違いとその要因について理解する。
②サクラマスが減少傾向にある現状とその要因について理解する。
③地域に古くから伝わる川魚文化の価値を理解する。
④河川環境の理解と保全に向けた取り組みを考える。

プログラムの流れ

1時間目
　サクラマスとヤマメの生態的なちがい
2時間目
　サクラマスとヤマメの形態的なちがい
3・4時間目
　地域の川魚文化
5～7時間目
　地域の川の現状と保全に向けた取組み

参加者の声

・みんなで地域を好きになり、みんなで守っていく意識を持つことが大事だと感じた。
・川の保全には農林漁業を維持していくことが大事と感じた。
・これからは川に関わる利害関係者を増やし、利用しながら保全する仕組みが必要。



福島県

山と海をつなぐ川を調べ、自然と人とのかかわりを考えよう

基にしたモデル的プログラム：「5つのものさし」で、地域の川や生きものを守っていく！～そして、自分の生活と関連づけて暮らしに生かす～
作成団体：一般社団法人四日市大学エネルギー環境教育研究会
実証協力校等：いわき市立錦東小学校
実証団体：NPO法人いわきの森に親しむ会

ESDの要素　多様性　相互性

能力／態度　多面　伝達　関連

プログラムの概要

森、川及び海で構成される自然の中で、川は森から水や栄養分、場合によっては、木の枝や樹木それに土砂をも受け入れ、それらを海まで運搬し、また途中で沈殿させ一部分解もする。また人の生活による排水やごみまでも受け入れている。

一方で人は昔から水を求めて川のそばに住み、飲料水、農業用水として利用してきた。近年では更に工業用水、発電、川魚の漁獲などに利用するほか生活排水の排水路としても利用している。

本プログラムでは、このように多くの要素を持っている地域の川について多様な姿を児童に見てもらい、今後環境問題を考えていくときに、多様な川の働きについて理解を深め、私たちの生活との関わりについて考える力を育んでもらうことをねらいとしている。

プログラムの目標

①川は山、森につながっていて、そこから流れ出す水はこの山、森の植生や土壌などに関係することに気づく。
②私達の生活が川の水質や、川の生き物達に及ぼしている影響についての理解を深める。
③学び、考えたことをまとめ、人前でわかりやすく話すことでコミュニケーション能力を育む。
④他人の発表を聴き、自分の認識を豊かにするとともに、将来、環境問題について総合的、多面的、主体的に考え、また行動する力と意欲を養う。

①地元の方の説明を受け川の様子を観察
②川の水の透視度を調べる
③川底の砂の粒子を観察

プログラムの流れ

1時間目
川はどこから始まりどこに流れていくの
2～4時間目
川の始まりはどこか探検しよう
5～7時間目
川の中流部の水と川底の様子を観察し、調べてみよう
8・9時間目
山によって川の水はどう変わるの、また川の砂ってどうなっているの
10・11時間目
これまで体験・観察・実験したことをまとめてみよう
12時間目
これまでの学習で学んだことを皆の前で発表しよう

参加者の声

・川砂の標本作りの後、ルーペで砂の粒を見たら、上流、中流、河口で粒の大きさや色、光ぐあいが違うことがわかった。
・枯葉を混ぜた土に色水を流すと、色が透明になってゆっくり出てくることがわかった。また山の土が、雨水をためて、きれいにして、ゆっくり流してくれることがわかった。

関東ブロック

関東ブロックは、茨城県、栃木県、群馬県、埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県、新潟県、山梨県、静岡県の１都９県。
多様な環境の中で、多彩なＮＰＯが活躍します。児童も教諭もファシリテーションを学ぶ新潟、地域課題に応じて適材適所のアクターを巻き込む茨城など先進的な取組をご覧ください。

持続可能な地域づくりの“肝”

～地域で継続的にESDをすすめていくためには～

関東ブロック

地方事務局

公益財団法人　日本環境協会

実行委員メンバー

ブロック実行委員

所属	役職	氏名
足立区立鹿浜第一小学校	校長	石田　好広
認定特定非営利活動法人茨城ＮＰＯセンター・コモンズ	事務局次長	大野　　覚
特定非営利活動法人那須高原自然学校	事務局長	真山　高士
特定非営利活動法人チャウス自然体験学校	代表	加藤　正幸
認定特定非営利活動法人環境ネットワーク埼玉	事務局員	秋元　智子
ＥＬＣｏの会	代表	市野　敬介
特定非営利活動法人新宿環境ネット	地域環境学習リーダー	村井　安成
認定特定非営利活動法人アクト川崎	理事長	竹井　　斎
みらいずworks	事務局長	本間　莉恵
公益財団法人キープ協会環境事業部	レンジャー	中山　孝志
特定非営利活動法人アースライフネットワーク	チーフマネージャー	青島　加奈

地域事務局

地域	団体名
茨城県	認定特定非営利活動法人茨城ＮＰＯセンター・コモンズ
栃木県	特定非営利活動法人那須高原自然学校
群馬県	特定非営利活動法人チャウス自然体験学校
埼玉県	認定特定非営利活動法人環境ネットワーク埼玉
千葉県	ＥＬＣｏの会
東京都	特定非営利活動法人新宿環境ネット
神奈川県	認定特定非営利活動法人アクト川崎
新潟県	みらいずworks
山梨県	公益財団法人キープ協会
静岡県	特定非営利活動法人アースライフネットワーク

ワーキンググループ

地域	団体名 or 所属・氏名
茨城県	常盤大学人間科学部准教授　小関一也、茨城県環境政策課主任　坂本努、いばらきＥＳＤ実践研究会　田中玲子、新荘市民センター運営審議会委員長　川又一朗、茨城県環境アドバイザー　中村恵美子、認定ＮＰＯ法人茨城ＮＰＯセンター・コモンズ事務局次長　大野覚
栃木県	那須町教育長　平久井好一、那須町教育委員会学校教育課　榎雅宏、那須町外国語指導助手（ＡＬＴ）小川奈穂・大森彩香、モンゴリアビレッジテンゲル支配人　藤村舞、ＮＰＯ法人那須高原自然学校理事長　小川虹生　他
群馬県	群馬県環境森林部温暖化対策室環境活動推進係　竹澤徹、足利工業大学総合研究センター長・教授　中條祐一、ＮＰＯ法人エコロジーオンライン理事長　上岡裕、ＮＰＯ法人ソーラーシティジャパン理事　大和田正勝、群馬県教育委員会東毛青少年自然の家　山口智義、ＮＰＯ法人チャウス自然体験学校代表　加藤正幸
埼玉県	さいたま市教育委員会学校教育部指導１課　浅野博一、海老沼小学校校長　原田守康、海老沼小学校教諭　井関聡美、ＮＰＯ法人埼玉環境カウンセラー協会　角江紘一、認定ＮＰＯ法人環境ネットワーク埼玉　秋元智子・後藤正喜
千葉県	浦安市教育委員会教育政策課　小倉隆史、浦安市立入船南小学校　鞠山誠人、株式会社共立理化学研究所開発部次長　石井誠治、認定ＮＰＯ法人持続可能な開発のための教育の10年推進会議代表理事　重政子、長南町立長南小学校　小関英司・永島絹代、ストップ地球温暖化千葉推進会議代表　内野英哲、浦安市環境保全課　広田由紀江、環境パートナーシップちば代表　桑波田和子、千葉自然学校理事　横山清美、千葉県環境研究センター　小川かほる、ELCoの会事務局長　市野敬介
東京都	新宿区立鶴巻小学校校長　國分重隆、新宿区立鶴巻小学校教諭　木村亜希、新宿区環境清掃部環境対策課長　本村知行、NPO法人新宿環境活動ネット　落合千秋、新宿区立環境学習情報センター地域環境学習コーディネーター　村井康成
神奈川県	神奈川県環境計画課　丸山美波、川崎市環境調整課　藤田晃央、子母口小学校教諭　潮龍馬、上丸子小学校教諭　中島波、認定ＮＰＯ法人アクト川崎理事長　竹井斎他
新潟県	日本自然環境専門学校校長　五十嵐実、新潟県新潟地域振興局　植木高広、新潟市環境政策課　小林由加子、通船川・栗ノ木川下流再生市民会議　星島卓美、新潟合板振興株式会社専務　渡辺康二郎、新潟県立大学国際地域学科２年生　小川達郎・新保千尋・三浦千明、みらいずworks　小見まいこ・本間莉恵・畑山萌子
山梨県	北杜市立高根清里小学校教頭　風間公朗、北杜市立高根清里小学校教諭　志村美紀子、公益財団法人キープ協会　関根健吾・中山孝志
静岡県	西郷小学校　飯田一貴・松下浩身・澤野敏郎・廣住悠野、掛川市環境政策課　小野田貴文・神野嵩之、ＮＰＯ法人WAKUWAKU西郷　理事長　松浦昌巳、ＯＭソーラー株式会社　村田昌樹・勝野秀之、ＮＰＯ法人アースライフネットワーク　服部乃利子・青島加奈他

問い合わせ先

環境省関東地方環境パートナーシップオフィス(関東EPO)
〒150-0001　東京都渋谷区神宮前5-53-67コスモス青山B1F
TEL：03-3406-5180　FAX：03-3406-5064
E-mail：kanto-epo@geoc.jp

関東ブロックの概要

「学びあい・育ち合う」

地域事務局を担う10のＮＰＯは、環境、教育、コーディネーションの専門家で構成されています。これまでの実践やネットワークを基盤に、授業やワークショップを行いました。実証の過程で地域のネットワークが育ち、授業を通じて教員や子どもが育ち、ＮＰＯが育ちました。

ネットワークのポイント、特徴、工夫した点

「多様性を活かす」

関東ブロックは、雪国の新潟から温暖な静岡、広大な平野と平野を潤す利根川・信濃川などの大河川と急峻な上越国境の山々にいたる多様性に富んだ自然環境が特徴。過疎に悩む山村と世界でも屈指の人口をかかえる首都圏が1時間で結ばれる交通網の発達も特筆に値します。

地域事務局を担ったのは、地域の実情・課題に精通し、環境、教育分野で幅広いネットワークを有するＮＰＯ。自然体験の専門家集団もあれば、ファシリテーターの養成に長けている団体、地域の課題に応じた適材適所の協働取組を生み出す中間支援組織、環境学習支援を継続する団体など、担い手の多彩さも大きな特徴です。多様なＥＳＤの担い手が学びあい、成長を続けているのが、関東ブロックの特徴です。

茨城県

なたねプロジェクト

～タネは命の循環～

基にしたモデル的なプログラム：なたねプロジェクト　見て食べて楽しんで！使った油はリサイクル
作成団体：株式会社アレフ
地域プログラム化メンバー：常磐大学人間科学部、茨城県環境政策課環境企画担当、いばらきESD 実践研究会、新荘市民センター運営審議会、茨城県環境アドバイザー、特定非営利活動法人茨城NPOセンター・コモンズ
実証協力校等：水戸市立新荘小学校

ESDの要素　有限性　連携性　責任性

能力／態度　未来　多面　参加

プログラムの概要

なたねをテーマに、①ものの循環（もったいない）②命の循環 ③家庭廃油循環の仕組みの、3つの循環を体験的に学ぶ。さまざまな種から油を抽出する実験を通じて、種は命、エネルギーの源であることや生物の成長・生活に油が重要な役割を担うことを理解する。次に、学校、地域の店舗、家庭を対象としたインタビューやアンケートによって、油のリサイクルの現状を把握する。家庭廃油回収の必要性に気づくとともに、ワークショップ形式で家庭廃油回収に関するアイデアをまとめ、地域住民や保護者を対象とした交流会を開催し、自分たちのアイディアを提案するとともに、対話を通じて地域の人の意識や行動の変革のきっかけとする。

プログラムの目標

①ものや命を大切にすることや、家庭廃油のゆくえについて学び、市民としての責任を感じる。
②タネや油と人間の生活、地産地消、3R、ライフスタイルの見直しなどを総合的に学ぶ。
③地域、家庭、校内へのインタビューや提案、交流を通じ、自分と地域とのつながりを意識する。
④グループワークや発表を重ね、他者と協力する態度やコミュニケーション能力を伸ばす。
⑤地域を巻き込んだ家庭廃油循環の仕組みづくりを提案し、計画を立て実行する力を身につける。

①種をつぶして油を採り、味見をする
②廃食油から作った燃料で自動車を動かす様子を見学
③調べたことをまとめて発表する準備

プログラムの流れ

1時間目
一粒の種から
2・3時間目
油の使い方を調べよう
4時間目
家の油はどこへ行く？
5・6時間目
油について提案をつくろう
7・8時間目
地域に提案しよう

参加者の声

・家庭の廃食油が循環していないことに気づき、自分たちができることを考えることができた。
・児童が「自分たちにできること」を考え、地域の人たちに発信したことで達成感があった。
・単年度での取組に終わらず、5年生に引き継ぎたい。

ちがう国でも同じこと

～モンゴルと日本の暮らしを比べてみよう～

基にしたモデル的なプログラム：ちがう国でも同じこと
作成団体：京都市立境谷小学校
地域プログラム化メンバー：モンゴリアビレッジ テンゲル、那須町教育長、那須町教育委員会 学校教育課、外国語指導助手～ALT～、ＮＰＯ法人 那須高原自然学校
実証協力校等：モンゴリアビレッジ テンゲル

栃木県

ESDの要素　多様性　有限性

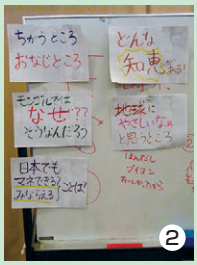
能力／態度　批判　多面　協力

プログラムの概要

モンゴル民族の伝統的な生活や文化を体験し、日本とモンゴルの違うところ、同じところを学ぶ。世界には、自然環境の多様性に応じて、さまざまな産業、生活、文化があることに気づき、自分の住む国や地域（那須地域）の産業、生活、文化がどのような自然環境を背景として成り立っているかについて興味を持ち、体験を通して掘り下げて考える機会を設ける。また、水や電気など利用できる資源が限られるモンゴルではどのような工夫をして生活するかを知り、資源を濫用せず、自然と調和した生活様式を構想する。最終日には各々の表現方法で調査結果を発表し、知識を共有し、互いに深めあうとともに、コミュニケーションや表現の力を高める。

プログラムの目標

①モンゴルの食べ物、音楽、衣服、家、模様、言語などの生活や文化を体験し、日本とモンゴルの違うところと同じところを知るとともに、その違いがどのような自然環境の違いを背景として生まれたかを理解する。
②世界には自然環境の多様さに応じて、さまざまな産業、生活、文化があることに気づくとともに、自分の住む国や地域にも興味を持つ。
③モンゴルの遊牧民の暮らしが自然環境と調和したものであることを理解し、自分たちの生活が自然を破壊していないかふりかえるとともに、資源を大量に消費する生活に向けて何をすべきかを考える。



①モンゴル民族の伝統的な家「ゲル」を組み立てる
②モンゴルと日本の違うところ・同じところを考えて出し合う
③モンゴルから来た人から、モンゴルの遊びを教えてもらう

プログラムの流れ

1時間目
オリエンテーションとアイスブレイク
2時間目
モンゴルの【住】
3時間目
モンゴルの【飲み物】
4時間目
モンゴルの【自然と暮らし・文化】
5時間目
モンゴルと日本の住居や食を比べてみよう
6時間目
モンゴルの【音楽】ホーミー、馬頭琴
7・8時間目
モンゴル探偵団～モンゴル模様＆クラフト（工作）～【模様】【言語】
9時間目
モンゴルの【食】～モンゴル餃子を作って食べる～
10時間目
モンゴルの【衣】～民族衣装体験～
11・12時間目
調査発表

参加者の声

・モンゴルの人は1年に2～3回引っ越す。
・ゲルは、雨が少なくて晴れの日が多いところの家。
・モンゴル人の大変さが分かった。
・モンゴルに行ってみたい。

群馬県

太陽エネルギーって何だろう？

～太陽の力でごはんができる～

基にしたモデル的なプログラム：地球温暖化を学び学校の省エネを考える「フィフティ・フィフティ」プロジェクト
作成団体：特定非営利活動法人FoEJapan
地域プログラム化メンバー：チャウス自然体験学校、足利工業大学　総合研究センター、特定非営利活動法人ソーラーシティジャパン、群馬県環境森林部温暖化対策室、群馬県教育委員会東毛青少年自然の家
実証協力校等：昭和村立大河原小学校

ESDの要素　有限性　連携性　責任性

能力／態度　批判　未来　多面

プログラムの概要

太陽由来のエネルギーをテーマに、日々の暮らしの中にどれだけのエネルギーが必要で、暮らしを便利にしているのか理解する。薪（熱エネルギー）、ソーラーパネル（太陽光エネルギーを電気変換）、ソーラークッカー（太陽熱エネルギー）の、3種のエネルギーで「パウンドケーキやご飯」を作り、体験を通じて多くのエネルギーが太陽のエネルギーから得られることや、それぞれのエネルギーの長所・短所を理解する。さらにエネルギーの消費量を知ることで、それによりどのような環境影響があり、どのような行動をとれば環境影響が抑えられるか考える態度を養う。最後に私たちが出来ることを提案し、まとめて発表する。

プログラムの目標

①私たちが使うエネルギーの多くが太陽に由来していることに気づく。
②日本がエネルギー多消費型の社会となっていることに気付き、地球温暖化問題の原因となっていることを理解する。
③日々の暮らしを支えるエネルギーがどのように得られているのかを理解する。
④地球温暖化問題を緩和するために、どのような取組が必要か考える態度を養う。

①ソーラークッカーは太陽の光を集めるので、サングラスをかけて観察
②自動車オイルの空き缶で作ったロケットストーブで調理
③3種類の熱源で作ったケーキとご飯を試食～どれが一番おいしくできたでしょう～

プログラムの流れ

1・2時間目
3つの道具で料理を作る
3時間目
毎日、どれくらいの電気を使っているのか調べる
4時間目
地球が熱くなっている？
5・6時間目
電気の無い暮らしを調べる
7・8時間目
学んだことをふりかえろう！
9・10時間目
自分たちにできることを考え・発表しよう！

参加者の声

・ソーラークッカーやソーラーパネルなど、今の日本にはそういう便利なものがあるので、それをもっといい形で使えるか？また、どんなことで使っていけばいいか？考えたい。
・太陽のエネルギーを考えて使えば、温暖化は防げると思いました。

ぼく、わたしはアースレンジャー

基にしたモデル的なプログラム：環境ウォッチングで提案づくり
作成団体：公益財団法人公害地域再生センター（あおぞら財団）
地域プログラム化メンバー：さいたま市教育委員会学校教育部、さいたま市海老沼小学校、特定非営利活動法人埼玉環境カウンセラー協会、認定特定非営利活動法人環境ネットワーク埼玉
実証協力校等：さいたま市立海老沼小学校

埼玉県

ESDの要素　相互性　連携性　責任性

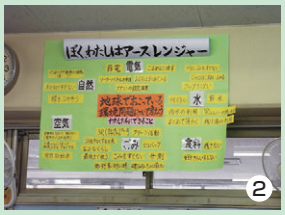
能力／態度　伝達　協力　参加

プログラムの概要

児童が地球環境問題に目を向け、課題をもち、調べ学習を行い、成果を発表することにより、「地球環境」に対する問題意識を高める。さらに、地球環境問題が身近な生活問題として起こっていることをとらえさせる。フィールドワーク等の体験活動を取り入れるとともに、身近な環境問題について知り、学んだことをポスター等にまとめ、グループごとに発表を行うことにより、友達と伝え合う楽しさを感じ、互いを認め合い、高め合う。さらに学んだことを実生活に生かすために、「ぼく、わたしの海老沼環境宣言」を各自が考え、発表することによって、知識を行動に結びつけ、主体的かつ能動的に社会とかかわる態度を育成する。

プログラムの目標

①現代社会では、地球温暖化、廃棄物、生物多様性の喪失など地球規模でさまざまな環境問題が深刻化していることに気づく。
②自分たちの身の回りでも環境問題が生じていることに気づく。
③地球規模での環境問題は、自分たちの生活や身近な地域の環境問題ともかかわりあっていることを理解する。
④身近な地域の環境を守るために自分ができることを考え、実践しようとする態度を養う。



①調べたことを地図や新聞などで表現
②調べてわかったことをもとにして、アースレンジャーの宣言作り
③地域の人も発表を見学

プログラムの流れ

1・2時間目
地球で起こっている環境問題について考えよう
3・4時間目
身近な環境の中で自分の課題をみつけよう
5・6時間目
課題解決のための情報を集めよう
7・8時間目
住みよい町にするために自分達のできる事を話し合い、まとめよう
9～11時間目
振り返りと発表

参加者の声

・草や木を大切にします。
・水のしせつは交代で24時間やっていることを知ったから、出しっぱなしはやめる。
・車をつくる人になりたいから、かんきょうにいい車をつくる。
・カワセミのためにごみをすてない。

ほんとうにきれい？

～長南の水から考えるわたしたちの未来～

基にしたモデル的なプログラム：「５つのものさし」で、地域の川や生きものを守っていく！～そして、自分の生活と関連づけて暮らしに生かす～
作成団体：一般社団法人四日市大学エネルギー環境教育研究会
地域プログラム化メンバー：ELCoの会、千葉県環境研究センター、長南町立長南小学校、ESD-J
実証協力校等：長南町立長南小学校

千葉県

ESDの要素　多様性　連携性　責任性

能力／態度　批判　未来　伝達

プログラムの概要

長南小学校の近くを流れる長南川（準用河川）は、下水道の整備が遅れていることから、家庭雑排水等の流入によって水質汚濁が進んでいる。児童が「５つのものさし」（1：自然のすがた、2：ゆたかな生き物、3：水のきれいさ、4：快適な水辺、5：地域とのつながり）を使って、川の状態を調査する。そして、自分たちの生活を「５つのものさし」を使ってふりかえり、これからの生活の中でどのような行動をしたらよいかを考え、保護者を招いて発表する。その後、保護者と一緒にこれから地域の中でできることを話し合い、実際の行動につなげる。

プログラムの目標

①長南川の中流・下流域において水質調査を行い、水質汚濁が進んでいることや汚れの原因が家庭雑排水等によることに気づく。
②「川の流れ浄化ゲーム」や「５つのものさし」による川の調査を行い、川の環境が人の生活と深くかかわりあっていることを理解する。
③長南川の環境を守るために自分たちに何ができるか話し合い、「長南水再生プロジェクト」を作成する。
④長南町役場地域整備室の方を招き、未来の長南についての「長南水再生プロジェクト」を発信し、地域の一員として自分の生き方や暮らしかたについて考えや見通しを持つとともに、今後の生活に生かす。

①川から汲んできた水の透明度を測定
②色々な川から汲んで来た水を調べ、比較表に書き入れる
③川から汲んで来た水のにおいをかぐ

プログラムの流れ

1・2時間目
「５つのものさし」とは何だろう
3時間目
自分たちで調査の準備をしよう
4～6時間目
「５つのものさし」で川を調べよう
7～9時間目
調べたことをまとめよう
10・11時間目
長南水再生プロジェクトを始めよう

参加者の声

・今までこんなにくわしく長南川を調べたことはなかったけれど、この勉強をして、これからは長南川を守り続けたいと思った。
・みんなで協力しなければ、川をきれいにすることができないから、町民と行政が協力しなければならないことがわかった。

新しいエネルギーを考えよう

～考え、話し合い、体験し、新しいエネルギーについての考えを発信する～

基にしたモデル的なプログラム：これからのエネルギー生活を考えよう～電気に頼りすぎた生活を見直そう～
作成団体：三環の会（なごや環境塾三期生の会）
地域プログラム化メンバー：新宿区立環境学習情報センター、ダイキン工業株式会社ダイキンソリューションプラザフーハ東京、東京ガス株式会社中央支店
実証協力校等：新宿区立鶴巻小学校

東京都

ESDの要素　多様性　有限性　責任性

能力／態度　批判　協力　関連

プログラムの概要

さまざまな発電の方法があることを実験によって学び、それぞれの発電方式の長所と短所を考える。日本の発電量と発電方法による比率を他の国と比べて、違いを考える。また、日本の発電量と発電方式の変遷を年代別に見ることによって、電化製品の歴史やエネルギー資源を他国に頼る現状を理解する。さらに、発電方式による環境負荷の違いを理解し、将来のエネルギー利用を構想し、地域、家庭、学校で実行する計画にまとめ、発表する。これらの学習を通じて、エネルギー資源に限りがあること、環境への負荷の少ないエネルギーの利用について、批判的・多面的に考え、より良いエネルギー利用のために自ら行動する態度を養う。

プログラムの目標

①日々の暮らしの中で使っている電気がどのようにして作られているか理解する。
②電力の使用量は私たちの暮らしの中で使う電気器具の増加とともに増え続けていることに気付き、生活様式の変化がエネルギー資源の枯渇や環境問題、経済の国際化とかかわりあっていることを理解する。
③電力の使用量や発電方式は、国によって異なり、エネルギー資源や生活様式などを反映していることを理解する。
④発電は環境に負荷を与え、発電方式によって負荷の大きさが異なることを知る。
⑤より良いエネルギーの使い方を考え、自ら実践できることを提案し、行動する態度を養う。

1

2

3

①ガスについての話をきく
②燃料電池の実験
③太陽光パネルの実験

参加者の声

・実験装置を失敗してもいいから自分達で動かせたので自分達でいろいろなことが分かりうれしかった。
・新宿の環境学習応援団の方々との授業で、普段使うことができないもので実験できたり、知らないことを教えてもらったりして楽しく学べた。

プログラムの流れ

1時間目
炭で電池をつくってみよう
2・3時間目
いろいろな方法で電気をつくろう
4時間目
家で使う電気はどうやって作っているのだろう
5・6時間目
日本で使う電気はどうやって作っているのだろう
7・8時間目
発電方式による環境への影響を考えよう
9・10時間目
新しいエネルギーを想像しよう
11・12時間目
これからのより良いエネルギー生活を考え実践しよう

神奈川県

地球温暖化・気候変動への理解と緩和策を考える

基にしたモデル的なプログラム：地球温暖化を学び学校の省エネを考える「フィフティ・フィフティ」プロジェクト
作成団体：特定非営利活動法人FoEJapan
地域プログラム化メンバー：神奈川県環境農政局環境部環境計画課、川崎市環境局総務部環境調整課、認定特定非営利活動法人アクト川崎
実証協力校等：川崎市立子母口小学校、川崎市立上丸子小学校

ESDの要素：有限性　連携性　責任性

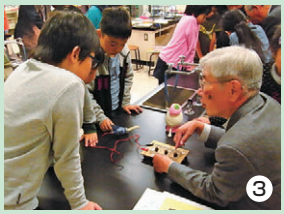
能力／態度：未来　多面　参加

プログラムの概要

地球温暖化・気候変動の原因、現状、さまざまな取組を地球規模、または市のレベルで学ぶ。省エネルギー、グリーン購入、3Rの3つの視点から温暖化防止活動の取組を考え、学校と家庭で実際に行動する。1～数ヶ月実践した後、結果をふりかえり、成果と課題を明らかにするとともに、より良い取組とするための提案を作成し、発表する。

プログラムの目標

①地球温暖化の今までの温度上昇度合いと、科学者による今後の予測を知ることで、問題を理解する。
②市内、区内の様々な取組を知ることで、自分たちでも出来ることがあることに気づく。
③身近な生活の中の自分たちの振る舞いが、地球規模の環境に影響を与えていることに気づく。
④省エネ、グリーンコンシューマ、3Rの分野で、家庭と学校でできる取組を考えて実践する。
⑤取組を成果と課題を明らかにし、改善するとともに、地域の人や校内で発表する。



①ストップ温暖化ゲームで温暖化を防ぐ方法を学ぶ
②空気と二酸化炭素の２種類のガスで覆った地球の模型を使って、地球の暖まり方を比較
③手回し発電機を使って色々な光源を光らせて、電力消費量の違いを実験

プログラムの流れ

1時間目
地球温暖化はなぜ起こるのだろう？
2時間目
身近なところでの取組を知る
3時間目
暮らしと地球温暖化
4時間目
電気を作ってみよう
5時間目
買い物と地球温暖化の関係を考えよう
6時間目
「３Ｒ」とは何だろう？
継続
行動しよう
7時間目
行動の結果をふりかえろう
8・9時間目
みんなに伝えよう！

参加者の声

・2100年に地球温暖化がどうなっているかが、テレビを使ってよくわかった。
・どのようにして地球温暖化がおこるのかがアニメでよく分かった。ぼくも地球温暖化がすすまないように心がけたいと思う。
・二酸化炭素をふやさないようにすることが、スゴロクでとてもわかりました。家で増やさないように、自分のしていることを続けたいです。

通船川プロジェクト

基にしたモデル的なプログラム：里山たんけん隊
作成団体：特定非営利活動法人きんたろう倶楽部
地域プログラム化メンバー：みらいずworks、通船川・栗ノ木川下流再生市民会議、新潟地域振興局、日本自然環境専門学校、新潟市環境部環境政策課、新潟合板株式会社、新潟大学国際地域学科学生
実証協力校等：新潟市立東山の下小学校

新潟県

ESDの要素　多様性　相互性　責任性

能力／態度　多面　伝達　参加

プログラムの概要

学校のすぐ裏を流れる通船川において、川の生物、川の歴史、産業との関わり、水質・環境問題について、5年生が調べ、自分たちが取り組む「マイアクション」とともに発表する。

調べるテーマを決めるときや「マイアクション」を考えるときに、ファシリテーションの手法を児童に用いさせることによって、主体的な学びの意欲と具体的な行動を引き出す。

調べ学習のときには、通船川で活動するNPO、木材関係の企業、行政職員など関係者に協力を求める。

発表は、4年生向けと保護者や地域の関係者向けの2回に分けて行う。児童は、発表の目的と対象に応じた内容や方法を考える。

プログラムの目標

①通船川流域における土地利用の変遷を調べ、河川と土地の形状とがかかわりあうことを学ぶ。
②通船川の掘り割りや閘門について、その歴史や仕組みを調べ、新潟港の盛衰や舟運を通して河川が産業とかかわっていることを学ぶ。
③通船川流域における生物や生息地及び、さまざまな生物の生態を調べ、河川と生物とがかかわりあうことを学ぶ。
④授業の中で、児童がファシリテーションの手法を用いることによって、主体的に学ぶ意欲や責任をもって地域に関わろうとする態度を養う。
⑤学んだことを、4年生児童に発表し、4年生が通船川の学習を引き継ごうとする意欲を引き出す。
⑥大人を対象に発表を行い、4年生とは違った伝え方を考え、実践する。

1

2

3

①通船川に住む生き物を調べるグループでは、魚などを観察
②児童がファシリテーションをして、通船川で知りたいことを出し合う
③通船川の環境を調べるグループでは、川の水を汲んで水質調査

参加者の声

・通船川のことを調べてみて、改めて、通船川は地域にとって重要な存在なんだと思いました。
・普通にやっている行動を見直していきたいと思った。洗剤を使う前に、汚れをふき取るとか、お母さんにも協力してもらおうと思う。
・通船川下りをしたい、泳いでみたい。
・通船川を新潟の新しい観光地にしたい。

プログラムの流れ

1時間目
通船川巡り（1日）
2・3時間目
通船川で見てみたいこと・知りたいこと
4時間目
調べ学習の進め方
5～7時間目
通船川探検隊
8・9時間目
発表準備
10時間目
「マイアクション」を作ろう！
11時間目
4年生に発表しよう！
12時間目
地域の人に発表しよう！

山梨県

清里の自然（学校林）を知ろう！

基にしたモデル的なプログラム：環境ウォッチングで提案づくり
作成団体：公益財団法人公害地域再生センター（あおぞら財団）
地域プログラム化メンバー：山梨県北杜市立高根清里小学校、公益財団法人キープ協会環境教育事業部
実証協力校等：北杜市立高根清里小学校

ESDの要素　多様性　有限性　責任性

能力／態度　未来　関連　協力

プログラムの概要

北杜市立高根清里小6年の総合的な学習の時間では、「清里の自然（学校林）を知ろう！」と題して、学区内にある学校林を用いた校外学習を行っていることから、これをベースとして、森林での自然観察や下草刈りなど森林管理作業を体験した後、森林の機能や役割の理解、地域の森林が抱える問題点を理解し、自らが課題解決の担い手という自覚を持つことを目標とした体験型の学習、調べ学習、グループワークなどを組み込んだプログラムとした。

プログラムの目標

①学校林での自然観察や人工林を管理する体験を通じて、身近な地域の自然への興味・関心を高め、地域の自然への愛着を生み出す。
②森林の機能や役割を知り、地域資源としての森林の利用の可能性についての理解を深め、積極的に保全する意欲を引き出す。
③地域において人工林が利用・管理されなくなったことによって生まれる問題を理解し、より良い森林をつくるためにできることを考え、他者と話し合いながら提案にまとめ、行動の変容を促す。

①②人工林と自然林の土の様子を観察・比較
③人工林と自然林の違いと生き物についての話を聞く

プログラムの流れ

1・2時間目
森林ってどんなところ？
3・4時間目
学校林（人工林）を知ろう！／校外学習
5・6時間目
学校林を育てよう！／校外学習
7・8時間目
学校林マップをつくろう！
9・10時間目
学校林の未来を考えよう！
11・12時間目
学校林活用プランを提案しよう！

参加者の声

・人工林と自然林とで土の様子に共通点や違いがあることが分かった。
・また今度、学校林に行ってみたい。
・地域の人に森を守ることを伝えたい。

緑のカーテンからはじめよう

～私たちの暮らしと太陽エネルギー～

基にしたモデル的なプログラム：みどりなライフ！～みどりのカーテンで始めよう身近なエコ活動～
作成団体：シンプル＆スローライフの会
地域プログラム化メンバー：掛川市立西郷小学校、掛川市 環境政策課、NPO 法人WAKUWAKU 西郷、OM ソーラー株式会社、NPO 法人アースライフネットワーク
実証協力校等：掛川市立西郷小学校

静岡県

ESDの要素　相互性　責任性

能力／態度　未来　多面　関連

プログラムの概要

緑のカーテンは、ツル性の植物で窓や壁を覆い、太陽光を遮ることによって夏季の室温上昇を抑える効果がある。最初に太陽光が大きなエネルギーを持っていることを、ソーラークッカーを用いた調理で体感する。その後、ツル植物を栽培し、成長の様子を観察するとともに、植物が繁茂した後に緑のカーテンの効果を測定する実験を行う。これらの活動を通じて、自然エネルギーの活用と制御の方法を学び、生活の中に太陽エネルギーや緑のカーテンを進んで取り入れようとする態度を養い、行動に結びつける。

プログラムの目標

①ソーラークッカーによる調理を行い、太陽光を鏡で集めると大きな熱を得られることに気づき、自然エネルギー利用の可能性と方法・技術を学ぶとともに、日常生活の中で利用できるか考え、実践する。
②ツル性植物を協力して育て、植物の成長を、季節、天候、気温、時間などと関係づけながら見守ることにより環境とのかかわりを考え、自然を愛護する態度を育てる。
③緑のカーテンが夏の気温上昇を抑制することを観察し、植物による遮蔽や蒸散の効果を理解するとともに、植物の大切さに気づき、暮らしの中に植物を取り入れるなど環境に配慮した生活の実践ができるようにする。

①グリーンカーテンについてのクイズで大盛り上がり
②ESDと環境をテーマにしたクイズ
③西郷小学校のグリーンカーテンの効果を写真で見る

参加者の声

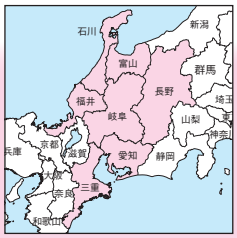
・私は、太陽の光でホットケーキがやけるなんて思ってもいなかったです。太陽の力はすごいんだなと思いました。
・太陽の力など分かりました。これからは、ここは温かいかな、などを考えてすごしていきたいです。
・このじゅ業で太陽エネルギーとくらしのかん係がよく分かりました。また調べてみたいです。

プログラムの流れ

1・2時間目
日をさえぎる・取り入れるくらし
3・4時間目
緑のカーテンとは何か考えよう！
5時間目
緑のカーテンをつくろう！～種をまく～
継続
緑のカーテンをつくろう！～育てる・観察する～
6・7時間目
種をとっておこう！～来年へ、地域へ“恵み”のおすそわけ～
8～10時間目
ふりかえり・まとめ

中部ブロック

ESD teachers in 中部。
ESDの大切さに気づいた先生。
果敢にESD授業づくりに挑戦した先生…。
この地域の大切な存在です。
先生と一緒につくった授業は、
どれも、子どもたちの瞳キラキラ、地域ワクワク、
そして教員ドキドキ…でした。



中部ブロック

持続可能な地域づくりの“肝”

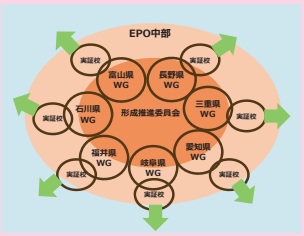
～地域で継続的にESDをすすめていくためには～

中部ブロックの概要

何のために実施するか～共通目標を掲げる～

中部7県のESD授業づくり及び実践の質と枠組みづくりを検討及び検証する形成推進委員会を設置。昨年度とほぼ同じメンバーで構成し、昨年度の成果と課題をふりかえりながら、事業検討を行いました。今年度の特徴は、全県で共通目標を掲げたことであり、また重要視したのが、「学習者主体である」「授業実践前後の変化を把握する」の2点です。

・中部7県の共通コンセプトについて議論しました。



・中部ブロックの全体図

ネットワークのポイント、特徴、工夫した点

児童生徒、教員、地域の声を事業に活かす

2年目となる今年度は、昨年度の成果を活かし、形成推進委員会で掲げた共通目標のもと、各県のワーキンググループを核に、ESD授業づくり及び実践を継続して実施及び促進するための基盤づくりを手掛けました。実証校の選定や学校とのESD授業づくりの調整については、基本的には形成推進委員等が中心に進め、地域の意向を聞きあい事業展開しました。また、北陸と東海・長野地域に各1名のESDコーディネーターを配置し、ESDの視点や手法のインプットを行いました。

実証授業後、必ずふりかえりをし、また実証授業を実施した教員や学校関係者、ワーキンググループを対象にしたアンケートや、授業を受けた児童生徒の授業実施前後のアンケートから、本事業に参加したことによる変化や効果を把握し、地域のESD推進ネットワークの機能を検討しました。

地方事務局

株式会社TREE、NPO法人ボランタリーネイバーズ

中部ESD環境教育プログラム形成推進委員会（敬称略）

所属	役職	氏名
富山大学人間発達科学部	教授	松本　謙一
金沢市教育委員会生涯学習部生涯学習課キゴ山少年自然の家	館長	池端　弘久
松本大学総合経営学部観光ホスピタリティ学科	准教授	中澤　朋代
岐阜大学教育学部	教授	巽　　徹
日本福祉大学国際福祉開発学部	教授	千頭　聡
三重大学教育学部	教授	松岡　守
金沢大学環境保全センター／北陸コーディネーター	センター長・教授	鈴木　克徳
環境省中部環境パートナーシップオフィス／長野・東海コーディネーター	チーフプロデューサー	新海　洋子

ワーキンググループ

地域	団体名
富山	富山大学、富山市立堀川小学校、富山市立神通碧小学校、環境教育ネットワークとやまエコひろば、富山県生活環境文化部、北陸コーディネーター／金沢大学
石川	金沢市教育委員会生涯学習部生涯学習課キゴ山少年自然の家、金沢市立三馬小学校、金沢市立十一屋小学校　金沢エコライフくらぶ、石川県環境部、北陸コーディネーター／金沢大学
福井	学校法人嶺南学園敦賀気比高等学校付属中学校、ふくいユネスコ協会、NPO法人エコプランふくい、福井県安全環境部、北陸コーディネーター／金沢大学
長野	松本大学、松本市立会田中学校、信州大学、松本市市民環境部、中信地区環境教育ネットワーク、一般社団法人長野県環境保全協会、NPO法人やまたみ、長野県環境部、長野コーディネーター／環境省中部環境パートナーシップオフィス
岐阜	岐阜大学、羽島市立正木学校、NPO法人e-plus生涯学習研究所、岐阜県環境生活部、東海コーディネーター／環境省中部環境パートナーシップオフィス
愛知	日本福祉大学、名古屋市立八熊小学校、NPO法人藤前干潟を守る会、名古屋市環境局環境企画部、東海コーディネーター／環境省中部環境パートナーシップオフィス
三重	三重大学、学校法人津田学園津田学園小学校、桑名市教育委員会、四日市大学エネルギー環境教育研究会、四日市自然保護推進委員会、三重県環境生活部、東海コーディネーター／環境省中部環境パートナーシップオフィス

問い合わせ先（EPO中部）

環境省中部環境パートナーシップオフィス
〒460-0003　名古屋市中区錦2-4-3　錦パークビル4F
電話：052-218-8605　FAX：052-218-8606
E-mail：office@epo-chubu.jp

生活科　市電通りのたからを見つけよう

※市電（富山市内を走る路面電車）

基にしたモデル的なプログラム：公園、探検・発見・ほっとけん！・・・誰が？
作成団体：幕張ベイタウンにエコパークをつくる会
実証協力校等：富山市立堀川小学校、富山市立神通碧小学校

富山県

ESDの要素　相互性　連携性

能力／態度　伝達　関連　参加

プログラムの概要

小学校の近くにある市電通りは、児童に馴染み深い場所。市電通りの「たから」を見つけることをテーマに、町探検に出かけ、たくさんのたからを見つける。そして、その中から気になった、ひとつのたからを探究する。たからを大切にしている地域の人に出会い、話を聞く中で地域の人の思いに気づき、地域をもっと知りたいという意欲を高める。そして、大切なたからを友達や家族、地域の人に伝えたいという思い、町への愛着を深める。

この授業は、富山市内で町探検の授業を行っている神通碧小学校と連携している。他校の児童の学ぶ姿から、新たな気づきをえて活動を見直し、自分や自分のたからを「自信まんまん」に思う児童を育む。

プログラムの目標

①市電通りのさまざまな場所や人々に関心をもち、ルールやマナーを守り、安全に気を付けて、見たり、調べたりしようとする。
②行きたい場所や会ってみたい人を決め、挨拶やインタビューの仕方を考えるとともに、地域で生活したり、働いたりしている人々と自分との関わりについて考え、多くの人に伝えることができる。
③自分たちが生活している地域のよさや、地域の人々が抱いている思いに気付くことができる。

1

2

3

①たからの写真展をしたい！
②警察官さんは、市電通りのたからだよ！
③伝えたい、市電のひみつ！

プログラムの流れ

1時間目
　自分のたからについて考えよう
2・3時間目
　市電通りのたからをたくさん見つけよう
4時間目
　映像を見て、これからの自分の探検について考えよう
5～8時間目
　1つのたからについて調べていこう
9時間目
　映像を見て、これまでの自分の探検について考えよう
10～12時間目
　探検で分かったことや感謝の気持ちを伝えよう

参加者の声

・市電はべんりなものだと伝えたい。
・なんでにこにこポストに顔がついているのか。
・町のたからについてたくさんのことを知ることができて良かった。
・いっぱい質問をして知ったことを伝えたい。なぜなら、知ったことを伝えなかったら意味がない。

石川県

つながりに気づく、つながりを築く

～ふるさと伏見川を守り続けるためには～

基にしたモデル的なプログラム：ふるさとのきれいな海を守ろう！
作成団体：環境ボランティアサークル亀の子隊
実証協力校：金沢市立三馬小学校

ESDの要素　相互性　連携性　責任性

能力／態度　未来　多面　関連

プログラムの概要

三馬小学校では、毎年市役所からサケの卵をもらい、育て、学校近くの伏見川に放流している。伏見川は児童にあまり親しみのない川である。「伏見川にサケを放流して大丈夫なのかな」。児童の疑問から授業はスタートする。伏見川はきれいな川なの?、昔と違うところはどこ?、上流・中流・下流の状況はどう違うの?、地域の人は伏見川をどう思っているのだろう?、児童の調べ学習が進む。森林組合、漁業組合の人にインタビューに出かけたり、森や海に行ったり、映像を見たり、そして児童は気づく。「人間と川、川の生き物はつながっている。伏見川を石川県NO.1の川にしたい」。児童が作成した自慢の「伏見川宣言」。伝えたくなる、何かをしたくなる授業である。

プログラムの目標

①伏見川を守り続けるために、森林、水生生物、防災とのつながりについて、自分なりの問題意識を持つ。
②自然の様子を調べたり、自然を守り続ける人の話を聞きながら、友達と協力して収集した情報を分析し、活用する。

①

②

③

①生きものと人間、どっちが大切？
②もっと川に親しんでほしいぞぉ！
③こんな伏見川にしたい！

プログラムの流れ

1時間目
伏見川は「サケの放流」ができるくらいきれいな川なのか
2時間目
川の水質調査 川の上流・下流のつながりを知る
3時間目
「サケを放流しても良いか」を明らかにする
4時間目
ふりかえり「ふるさと伏見川を守り続けるために何ができるか」考える
5時間目
森林見学　上流、森林と伏見川のつながりを調べる
6時間目
伏見川と地域の人のつながりを調べる
7時間目
「伏見川を守り続けるために何ができるのか」を考える
8時間目
地域の人の伏見川に対する思いを知る
9時間目
話合い「伏見川を石川No.1の川にするには」
10・11時間目
発表会準備
12時間目
学習発表会

参加者の声

・伏見川が好きで、みんなで「石川No.1の伏見川にしよう！」って言って、みんなの思いがたくさんつまっている川。
・伏見川はなくてはいけないと思います！この地域が豊かなのは、伏見川から水をもらい、畑と田んぼができ、くらしに役立っているからです。
・伏見川は10年後も20年後も愛される川になってもらえる川になってほしいし、生き物がいるからすごく大切だと思います。

福井県

総合的な学習の時間ふるさと敦賀塾スペシャルセミナー「100年後の敦賀で世界遺産候補は何か」

基にしたモデル的なプログラム：川は自然の宝箱
作成団体：多摩市立連光寺小学校
実証協力校：学校法人嶺南学園敦賀気比高等学校付属中学校

ESDの要素　多様性　責任性

能力／態度　未来　多面　関連

プログラムの概要

敦賀市は自然が豊かであり、ラムサール条約に登録された「中池見湿地」がある。一方、エネルギーを供給している「原子力発電所」もあり、福島原発事故以降、原発に対して不安を抱えている市民も多い。

本プログラムは、「100年後の敦賀で世界遺産候補は何か」をテーマとし、「中池見湿地」と「敦賀原子力発電所第一号機」を候補に、それぞれの特徴を調べ、生徒自身の思いや考えを踏まえて生徒同士の話し合いを行う。また、地域の人々の情報を加え、最終的に候補となる場所を決定し、その理由を含めて説明を聞き合う授業を行う。

1年生から3年生が連携して、縦割り班で取り組む。

プログラムの目標

①人・もの・自然との繋がりと広がりを理解し、それらを総合的に考える習慣を身につける。
②人・もの・自然と自分との繋がりに関心を持ち、それらを尊重し大切にする態度を養う。
③見通しや目的意識を持って未来像を予測・期待し計画する姿勢を育てる。

①100年後世界遺産候補にしたいのは？
②「中池見湿地かな…。候補は。」
③ふるさと敦賀をこれからも考えていきたい

参加者の声

（生徒）
・この先敦賀はどう発展するのか。また、どうすれば発展していくのか知りたい。
・敦賀発電所一号機のこれから廃炉に向けてどうやって行っていくのか。代わりになるものはあるのか興味がある。

（先生）
・総合の授業のあり方について改めて考えることができた。今自分たちの暮らす地域が持続発展するためには、どのようなことが必要なのかを意識して授業するよう努めた。

プログラムの流れ

1・2時間目
敦賀の魅力
3・4時間目
敦賀の世界遺産候補は？（気比神宮、気比の松原、中池見湿地、敦賀原発一号機の建物、金崎宮）
5・6時間目
敦賀発電所一号機のここがすごい
7時間目
中池見湿地のここがすごい
8・9時間目
究極の選択　「世界遺産にするなら中池見湿地か敦賀発電所一号機か？」

長野県

地域の自然を見つめよう

基にしたモデル的なプログラム：環境ウォッチングで提案づくり、里山たんけん隊、さまざまな視点から水について考えよう～水の総合学習プログラム～
作成団体：公益財団法人 公害地域再生センター（あおぞら財団）、特別非営利活動法人 きんたろう倶楽部、教育開発研究会
実証協力校：松本市立会田中学校

ESDの要素　相互性　有限性

能力／態度　未来　協力　参加

プログラムの概要

長野県では「学校登山」が行われる。登山を体験することで、自然、山と人間のつながりや環境に関する課題を認識する。会田中学校は松本市の山間部（四賀地域）にあり、学校の敷地内に学有林がある。しかし、生徒にとって、その風景や環境は当たり前であり、地域の自然に目を向け、活動する機会はあまり多くない。このプログラムは、学校登山での経験や気づきや、地域の自然環境についての体験型の学びや話し合いを通して、地域の自然環境や人々への理解と愛着を深め、四賀の森林、自然とどう関わっていくのか、地域に関わる意欲を育む。

プログラムの目標

学校登山の経験、水の学習、身近な里山の木材を使ってのエネルギー学習、バウムクーヘンづくり等木の体験学習を通して、地域（四賀）の自然、里山への理解を促し、自主的、自発的に関わる思考を育む。

①四賀のこと「もっと」知りたい！
②、③裏山の木材の炭で、初めてのバウムクーヘンづくり！

プログラムの流れ

事前学習　学校登山
1・2時間目
登山ふりかえり学習
3・4時間目
環境教育「水ってなんだろう」
5・6時間目
森林資源の活用、自然エネルギーに関する学習
7・8時間目
木に関する授業とバウムクーヘンづくり体験学習
9時間目
学習のふりかえり
10時間目
「四賀の地域資源である森と共生するために何ができるか」考える
11時間目
学習発表会

参加者の声

・四賀地域について知らないことなどがまだあるから興味がある。
・四賀の自然をもっと知りたい。自分自身で体験しながら学ぶ学習がおもしろかった。
・自然のパワーはすごい。
・日々の生活にメリットがあったりすることが多い。

人にやさしく 自然にやさしく

～環境といのち～

基にしたモデル的なプログラム：くらしマイレージ講座
作成団体：NPO法人 環境ネットワークくまもと
実証協力校：羽島市立正木小学校

岐阜県

ESDの要素　有限性　連携性　責任性

能力／態度　未来　多面　参加

プログラムの概要

地球温暖化の原因やその改善策をきちんと理解し、自分の問題として受け止め、自分にできることを見つけ、実践する児童を育む。地球温暖化が、自分の生活に深く結びついていることに気づき、その進行を防ぐための方法を考える。地球温暖化の原因であるCO_2を減らすために、当たり前に使用している電気などのエネルギーの使用を減らすことの重要さを理解する。「省エネ」をテーマに「自分には何ができるのか」の課題を設定し、夏休みに取り組み、結果をまとめ、仲間に発表する。仲間の発表を共有することで、いろいろな省エネ活動があることに気づき、継続して省エネに取り組む意欲を育む。また、他の学年や保護者や地域の人に発信し、みんなで省エネに取り組んでいくことを提案する。

プログラムの目標

①地球温暖化は身近にも影響を及ぼしていること、自分達の生活にも深くつながっていることを理解し、自分達の問題であると受け止め、当事者意識を育む。
②地球温暖化を防止するために自分に何ができるかを知り、考え、実践し、発表するという学びを積み重ねることで、「継続して取り組む」意欲を育む。
③発信することで、他者に伝えるコミュニケーション力、参加する態度を育み、みんなで共に行うことで、多面的に課題解決を導く力を育む。

①発表！夏休みに調べたこと
②「おさがりの服を着ます」。僕たちのエコ宣言！
③4年生に地球温暖化を伝えるよ

プログラムの流れ

1時間目
　地球温暖化はなぜ起こるのだろう
2時間目
　地球温暖化を防ぐにはどうしたらいいのだろう
3時間目
　家の中でどれくらいの電気を使っているのだろう
4時間目
　自分にできる省エネを考えよう
夏休み　家で省エネ活動に取り組む
5時間目
　発表会準備
6・7時間目
　中間発表
8時間目
　学校でできる省エネを考えよう
9時間目
　次世代エネルギーについて知ろう
冬休み　家で省エネ活動に取り組む
10時間目
　発表会準備
11・12時間目
　学習発表会

参加者の声

・節電とか、そういうことを1人でやっていても省エネにならないと思っていたけど、1人だけでもやれば変わると思い始めました。省エネに興味がでてきました。
・みらいの子どもたちのために、電気をあまり使わないようにしていきたい。
・4年生にも分かりやすく伝えたし、省エネを取り組むと気持ちがいいから。
・地球温暖化は自分たちの地球のことだから。

季節と堀川の生物

基にしたモデル的なプログラム：ふるさとのきれいな海を守ろう！、「生き物たちとの持続可能な社会を考えよう」(自然調和型社会学習プログラム)
作成団体：環境ボランティアサークル亀の子隊、岡崎市立新香山中学校
実証協力校等：名古屋市立八熊小学校

愛知県

ESDの要素　多様性

能力／態度　未来　多面　関連

プログラムの概要

八熊小学校は全学年を通じて、学校のすぐ近くにある堀川について学習している。4年生は、季節と生物の関係をテーマに、生物多様性が豊かな藤前干潟と、都心を流れる堀川を題材に学習する。藤前干潟、堀川に出掛け、生物の様子を観察したり、季節と生物の関係を考えるために気温や水温を測定したりする。また、堀川に生息しているチチュウカイミドリガニを中心にして、生物にとって堀川の環境はすみやすいのか、生物は季節に適応してどう生息しているかを藤前干潟との比較や、昨年の気温や水温、カニの捕獲量のデータを用いて考える。

川や干潟など身近な自然環境の状況を知り、大切にしようとする態度を育てる。児童が地域の自然環境に気付く授業であり、その気付きを次の学年へつなげる。

プログラムの目標

①児童にとって身近な、藤前干潟と堀川をフィールドに、チチュウカイミドリガニを中心に堀川に生息している生物が季節に適応してどう生息するかを考える。
②身近な環境を大切にしようとする態度を育てる。

①藤前干潟とこどもたち！
②「トラップをしかけるぞ！何匹捕まるかっ！」
③堀川のカニはどんな様子かな？

プログラムの流れ

1～8時間目
　秋の藤前干潟
　秋の堀川の観察
9時間目
　藤前干潟と堀川の生物
10時間目
　堀川の生物とその環境（季節）
　フィールドワーク
　「生物のすみか」について考える

参加者の声

(児童)
・生物はそんな環境でも生きられるということがよく分かった。
・生物がどうやってすごしているのかがよく分かった!!!ふしぎなことがよく分かった。
・カニは、環境がよくないと、現れないということ！
・堀川は、海とつながっているということ。いろんな生き物がすんでいることがよく分かった。
・堀川に何がいるのかな?と考えられた。
(先生)
・年間で藤前干潟や堀川に関わってきたので、児童の思考が深まり、多様な考えが引き出せた。

三重県

水辺の環境調査

基にしたモデル的なプログラム：「５つのものさし」で、地域の川や生き物を守っていく!～そして、自分の生活と関連づけて暮らしに生かす～
作成団体：一般社団法人　四日市大学エネルギー環境教育研究会
実証協力校等：学校法人津田学園津田学園小学校

ESDの要素　多様性　相互性　責任性

能力／態度　未来　多面　関連

プログラムの概要

学校周辺に位置する嘉例川（身近にある自然）を中心に、上流・中流・下流の3ケ所で水辺の環境調査（5つのものさし）を行い、同時に水質調査も実施して、川の状況を把握する。3ケ所それぞれに生息する生き物や水質の状況、川の周りの環境の特徴や変化を捉え、その違いに気づく。護岸工事がされたまっすぐに整備された川の状況について話し合いを行い、人間が川の恵みを得て、生活していることに気づき、一方で、安心安全に暮らすために人工的に整備していることを学ぶ。生き物にとって、人間にとって、どのような川であることがよいのか、将来どんな川であってほしいかなど、自分の問題として川を捉えることのできる児童を育む。

プログラムの目標

①自然との関係性を考えるきっかけの一つとする。
②様々な調査を通して、まとめる力を付ける。
③自然を保護・再生する力を付ける。
④自分の生活と関連づけて今後の生活に活かす。

①「川にはこんな生きものがいたんだよぉー。」
②工事現場のおじさんと生きものたちが笑ってる！
③川はどんなところ？中流で調査！

プログラムの流れ

1時間目
水辺の環境調査の目標と「5つのものさし」
2時間目
出前授業「嘉例川と生き物たち」
3時間目
調査の準備
4～6時間目
現地調査、科学的調査
7時間目
水槽の様子について考える
8時間目
川の生き物について考える
9時間目
川の環境について考える、「コンクリートで固めた川」について考える
10・11時間目
学習のまとめ、発表準備
12時間目
発表会

参加者の声

（児童）
・サカナの気持ちが自然にわかってきた。
・サカナは今の環境をどう思っているのか？などに興味がある。
・生き物が川によってちがうので、ちょっと興味があります。
・自分が川とかかわりがあると知ったから、地域の川や生きもの、自然について興味がある。

（先生）
・「今後も考えさせ続ける」という概念が、今までの授業とは大きく異なっていました。

解説【3】ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度（例）

ESDで重視する能力・態度として、7つの例を示しています。この能力・態度と関わらせながら、単元目標や授業目標を設定することで、ESDの視点に立った学習指導が展開できます。ただし、能力・態度はこれらに限定されるものではありません。

①批判的に考える力

批判

・合理的、客観的な情報や公平な判断に基づいて本質を見抜き、ものごとを思慮深く、建設的、協調的、代替的に施行・判断する力

＜具体例＞
○他者の意見や情報を、よく検討・理解して採り入れる
×得られたデータや考え方を鵜呑みにする
○積極的・発展的に、よりよい解決策を考える
×消極的・悲観的に考え、すぐに諦めて、答えだけを得ようとする

②未来像を予測して計画を立てる力

未来

・過去や現在に基づき、あるべき未来像（ビジョン）を予想・予測・期待し、それを他者と共有しながら、ものごとを計画する力

＜具体例＞
○見通しや目的意識を持って計画を立てる
×無計画にものごとを進めたり、その場しのぎをしたりする
○他者がどのように受け取るかを想像しながら計画を立てる
×独りよがりにものごとを進めてしまう

③多面的、総合的に考える力

多面

・人・もの・こと・社会・自然などのつながり・かかわり・ひろがり（システム）を理解し、それらを多面的、総合的に考える力

＜具体例＞
○廃棄物も見方によっては資源になると捉えることができる
×役に立たないものは不要だと考える
○様々なものごとを関連付けて考える
×まとまりがなく、断片的な見方をする

④コミュニケーションを行う力

伝達

・自分の気持ちや考えを伝えるとともに、他者の気持ちや考えを尊重し、積極的にコミュニケーションを行う力

＜具体例＞
○自分の考えをまとめて簡潔に伝えることができる
×他者の意見の欠点ばかりを指摘し、自分の考えを言わない
○自分の考えに、他者の意見を取り入れる
×他者の意見を聞こうとしない

⑤他者と協力する態度

協力

・他者の立場に立ち、他者の考えや行動に共感するとともに、他者と協力・協同してものごとを進めようとする態度

＜具体例＞
○相手の立場を考えて行動する
×自分のことしか考えない
○仲間を励ましながらチームで活動する
×身勝手な行動、同調しない態度をとる

⑥つながりを尊重する態度

関連

・人・もの・こと・社会・自然などと自分とのつながり・かかわりに関心をもち、それらを尊重し大切にしようとする態度

＜具体例＞
○自分が様々なものごととつながっていることに関心をもつ
×自分に直接関係のあることしか関心がない
○いろいろなもののお陰で自分がいることを実感する
×自分は一人で生きていると思い込む

⑦進んで参加する態度

参加

・集団や社会における自分の発言や行動に責任をもち、自分の役割を理解するとともに、ものごとに主体的に参加しようとする態度

＜具体例＞
○自分の言ったことに責任をもち、約束を守る
×無責任な行動ばかりで、きまりを守らない
○進んで他者のために行動する
×自分が得をすることしかしない

国立教育政策研究所　教育課程研究センター
「ESDの学習指導過程を構想し展開するために必要な枠組み」より

近畿ブロック

歴史が深い近畿の特徴を生かし、時間軸のつながりをESDの視点として大切にして取り組みました。
2010年に平城遷都1300年を迎え、悠久の時を刻んできた奈良では、奈良公園の鹿は春日大社の神の使いとされています。
（写真提供：奈良市観光協会）

近畿ブロック

持続可能な地域づくりの“肝”

～地域で継続的にESDをすすめていくためには～

近畿ブロックの概要

「地域を教材にしたESDを地域総がかりで進める」

近畿2府4県それぞれにおいて、ESDに造詣が深く、教育現場をよく知る方にプロデューサー役を依頼し、各プロデューサーより推薦していただいた実証協力校においてプログラムの作成、実証を行いました。プログラム作成にあたっては、「地域を教材化する」ということに焦点をあて、「効果を高める重要なポイント」を可視化しました（近畿版プログラム集）。実行委員会では、近畿地域の地域性・文化性を大切にしたESDを地域の多様な主体が協働することによって進めるしくみづくりについて議論を行いました。また昨年度に引き続き「ESD：いのちをつなげる教育」というキャッチコピーでプログラム作成や普及啓発事業を開催し、ESDの価値観の共有・普及促進を図りました。

①実行委員会での協議
②ESDフォーラム2015におけるワークショップの様子
③近畿ブロック地域プロデューサー

ネットワークのポイント、特徴、工夫した点

「“ESD学びのプラットフォーム”の創出」

「ESD学びのプラットフォーム」を各地域で昨年度から継続または創出し、地域環境課題解決を進める地方自治体環境政策担当者と学校教員が課題解決に向けた対話を通して地域を教材化することの有用性に気づき相乗効果を生むことを目指しました。特にこれまで接点がなかった両者が出会う場としてプラットフォーム機能の有用性が確認できました。また、ESDに取り組む教員の裾野を広げるため「ESD応援セミナー」を各地域で開催し、ESD実践のための指導力向上支援や教員・環境政策担当者・地域人材などのマッチングを行いました。これらのしくみにより、多様な主体が共に創る持続可能な地域への発展が促進されると期待されます。

地方事務局

一般社団法人　コミュニケーションデザイン機構

ブロック実行委員/地域プロデューサー

	所属	役職	氏名
有識者	奈良教育大学	学長	長友　恒人
有識者	公益社団法人日本ユネスコ協会連盟	理事	米田　伸次
滋賀地区プロデューサー	元滋賀県環境学習センター／山内エコクラブ	所長／理事	井阪　尚司
京都地区プロデューサー	京都教育大学　附属教育実践センター機構／社会科学科	機構長／教授	水山　光春
大阪地区プロデューサー	大阪ECO動物海洋専門学校	教務副部長	城者　定史
兵庫地区プロデューサー	宝塚市自然保護協会／自然体験教育研究所	会長／所長	足立　勲
奈良地区プロデューサー	奈良教育大学　次世代教員養成センター　ESD・課題探求部門	専任講師	中澤　静男
和歌山地区プロデューサー	和歌山県立自然博物館	主査学芸員	平嶋健太郎

本事業にご参画・ご協力いただいた皆様

地域	団体名 / 所属・氏名
滋賀地区	東近江市立能登川南小学校、滋賀県教育委員会学校教育課、滋賀県環境政策課、東近江市教育委員会学校教育課、東近江市生活環境課
京都地区	京都市立梅津北小学校、京都市立桃山小学校、京都教育大学附属京都小中学校、京都府教育庁指導部学校教育課、京都府環境政策課、京都市教育委員会学校指導課、京都市環境総務課、授業実践グループ〈深蔵心理（京都教育大学附属京都小中学校教諭）、岡本洋子（京都市立桃山小学校教諭）、飯野裕子（京都市立梅津北小学校教諭）〉、授業支援グループ〈水山光春（京都教育大学教育学部教授、藤井聡（京都大学大学院工学研究科教授）、松村暢彦（愛媛大学大学院工学研究科教授）、京都市都市計画局歩くまち京都推進室、諏佐準一（京都市教育委員会学校指導課）、林正和（同前）、東徹（一般社団法人システム科学研究所調査研究部長）
大阪地区	大阪市立伝法小学校、大阪海さくら、大阪府教育委員会小中学校課、大阪府地球環境課、大阪市教育委員会初等教育担当小学校教育グループ、大阪市環境局環境施策課、（学）大阪ECO動物海洋専門学校
兵庫地区	丹波市立遠阪小学校、兵庫県教育委員会義務教育課・丹波教育事務所教育振興課、兵庫県環境政策課、丹波市教育委員会学校教育課、丹波市環境政策課、丹波市立青垣いきものふれあいの里、地域の自然愛好家・専門家など指導者
奈良地区	奈良市立佐保小学校、奈良県教育委員会学校教育課、奈良県環境政策課、奈良市教育委員会学校教育課、奈良市環境政策課、室賀泰二（NPO法人奈良環境カウンセラー協会）、谷幸三（水生生物研究者）、地域の方々、奈良教育大学ESD連続セミナー
和歌山地区	和歌山県立みはま支援学校、和歌山県教育庁学校指導課、和歌山県環境生活総務課、美浜漁協、和歌山県立自然博物館

問い合わせ先

近畿環境パートナーシップオフィス（きんき環境館）
〒540-6591　大阪市中央区大手前1-7-31　OMMビル5F
TEL 06-6940-2001

滋賀県

見つけて、考えて、つなぐ猪子山学習

基にしたモデル的なプログラム：里山たんけん隊、森林プログラム（いなぎの森100年プロジェクト）
作成団体：特定非営利活動法人きんたろう倶楽部、東京都稲城市立稲城第一小学校
実証協力校等：東近江市立能登川南小学校

ESDの要素　多様性　相互性　連携性

能力／態度　多面　伝達　関連

プログラムの概要

能登川南小学校横に近接する標高267mの猪子山は、豊かな自然に恵まれ、多くの人々の信仰を集める能登川地域唯一の里山であり、頂上から湖東平野と伊庭内湖・琵琶湖が一望できる。

Plan→Do→Check→Action（PDCAサイクル）で環境学習を進めているこの学校は、県が進めるエコ・スクールの活動を12年続けている。猪子山と地域を流れる山路川とを関連させながら、多様な生物の生息環境を保全するとともに、地域ボランティアと高等学校緑地デザイン科の生徒の支援を得ながら、森林再生への活動を展開する。猪子山学習はふるさと学習とも呼ばれ、総合的な学習の時間を中心に系統的に学ぶESD教育である。

プログラムの目標

①猪子山の豊かな自然に気づき、生物の多様性の保全と豊かな感性を育む。
②猪子山活動を通して、地域の人・社会・自然・文化・伝統などとつながり、先人の知恵に学び、より良いふるさとを創ろうとする態度を養う。
③猪子山の森林を再生するために植樹した広葉樹を守る活動を進め、次代につないでいく。

①猪子山の湧水探し
②猪子山山頂からの展望
③能登川博物館学芸員の説明

プログラムの流れ

1～3時間目
　グループで春の猪子山学習の計画を立てて猪子山の調査を行い、葉っぱ図鑑を作る
4・5時間目
　猪子山山麓の竹を伐採して整備する
6時間目
　伐採した竹を使って竹垣を作る
7時間目
　グループで秋の猪子山学習の計画を立て、追及する課題を明確にする
8～10時間目
　猪子山に登り、課題を追求する
11時間目
　体験したことをまとめる
12時間目
　活動したことを発表する

参加者の声

・木々が空気を美しくしたり、森が水を溜めたりすることが分かった。森林再生では、このことを思いながら木を植えたい。
・山から美しい水が出ていた。水質検査器で水を測ったが、綺麗だった。湧き出る水を手で触ったら冷たかった。匂いもかいでみた。森の匂いがした。

京都府

「歩くまち京都」学習

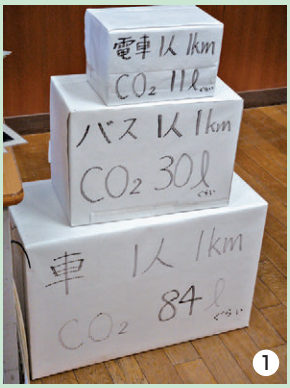
基にしたモデル的なプログラム：Food! ～食を通して世界とのつながりを考える～
作成団体：公益財団法人岡山県環境保全事業団
実証協力校等：京都市立梅津北小学校、京都市立桃山小学校、京都教育大学附属京都小中学校

ESDの要素 相互性 有限性 責任性

能力／態度 批判 未来 参加

プログラムの概要

クルマは実に便利で快適な乗り物で、我々の社会の豊かさの象徴でもあるが、増えすぎることによる弊害も大きい。何よりCO2の大量放出は地球温暖化の元凶の一つと言われている。しかし、だからといってすべてのクルマをやめればよいというわけではない。消防車やパトカーは必要だろうし、お年寄りや足の不自由な人にとっては移動の手段として必需品である。要は過度にクルマに頼りすぎることなく「賢く」つきあうことが必要なのである。本学習は、一見、個人的利益と社会的利益のトレードオフの関係に見えるクルマ社会を我がこととして見直すことを通して、タテマエではなくホンネで、自分と環境とクルマ社会の関係を考えようとするものである。



①

②

①移動手段をCO2排出量で比べてみよう
②低学年：市バスとともだちになろう

プログラムの目標

本プログラムは小学校の全学年を通したプログラムで、次の目標を持っている。

①低学年…日ごろ馴染みのない公共交通機関としての市バスに親しみを持つとともに、市バスにはより多くの人に利用してもらえるように、様々な工夫がされていることを知る。

②中学年…自分自身とクルマとの関係を、環境、安全、健康等、多様な視点から振り返ることを通して、クルマに頼りすぎることなくクルマと「賢く」つきあうにはどのようにすればよいかを考える。

③高学年…自分自身のみならず、「社会」全体とクルマとの関係を考えることを通して、未来の京都のあるべきまちづくりや交通環境について、自分なりの見通しを持つことができる。

プログラムの流れ

【低学年】市バスとともだちになろう
- ○バスに乗った経験を発表する
- ○どこのバス停から乗ったか思い出す
- ○市バスに乗ってどこまで行けるか考える
- ○値段を予想する
- ○市バスの車内クイズ

【中学年】クルマと生活の関係を見直そう
- ○クルマを使う生活について考える
- ○クルマを使う生活、使わない生活について考える
- ○かしこいクルマの使い方を話し合う
- ○「歩くまち・京都憲章」で何が言いたいかを考える
- ○学習のふりかえり

【高学年】秋の嵐山は大渋滞
- ○「ようこそ、嵐山へ」のパンフレットをつくって、あらためて感じた自分たちのまちへの思いを話し合う
- ○嵐山を観光するなら、どんな乗り物で来ることをおススメするか話し合う
- ○パーク＆ライドや「歩くまち京都」について知り、「歩くまち嵐山」につなげる
- ○交通について、分かったこと感じたこと、観光客に伝えたいことを書く

参加者の声（先生の感想より）

【低学年】
子どもたちが日ごろあまり目にすることのない写真や、クイズ形式で授業を行ったので、児童は知的好奇心を刺激され、大変意欲的に学習に取り組んでいた。

【中学年】
・児童はクルマが二酸化炭素を排出していることなど、環境に良くない事実についてはよく知っていた。

【高学年】
・渋滞する嵐山の写真に子どもたちは大きく反応していた。自分たちのよく知っている場所であったため、問題意識を強く持つことができたようである。

大阪府

魚庭（なにわ）の海を知って、アマモを育てよう大作戦！

基にしたモデル的なプログラム：ホタルを通して里山環境を考える～中学生による生物多様性を考えた環境再生プログラム～
作成団体：小野学園女子中学・高等学校
実証協力校等：大阪市立伝法小学校、大阪海さくら

ESDの要素　多様性　相互性　連携性

能力／態度　未来　多面　参加

プログラムの概要

大阪湾は、かつて魚庭（なにわ）の海といわれ、魚が沢山とれる豊かな海だったが、開発による渚の埋め立てや汚染水の流入などで環境は悪化する一方であった。近年、大阪湾再生活動が盛んになり、その一つがアマモ場の再生である。アマモ場の減少とその影響について学び、アマモ（成長過程・アマモの海に果たす役割など）についてを学ぶ。アマモの種を植える体験・観察を通して、自分たちの周りの環境（海や自然）や地域に興味を持ち、自ら調べ学び、行動する子どもの育成をはかる。アマモの苗を育成する体験学習を通し、身近にある淀川と大阪湾が繋がっている事を理解し、自分たちの住んでいる地域の環境について考えるきっかけをつくる。

プログラムの目標

①自分たちの住む地域と大阪湾の歴史を知る。
②大阪の海と淀川のつながりを認識する。
③アマモ場が海に果たす役割を知る。
④アマモを育て・観察し、観察記録を作成する。
⑤クラスの友達同士でアマモの成長の様子や条件を比較しアマモの生育条件について考える。
⑥疑問に思ったこと、分からないことをどうしたら解決できるかを考え、行動にうつす。

①大阪海さくらから自分たちの生活と大阪湾の関わりの話
②アマモの種植えの体験
③種植えをしたアマモは教室で育て、やがて海へ返す

プログラムの流れ

1時間目
　私たちの身近な環境を理解する
2時間目
　自分たちの生活と大阪湾との関わりを理解する
3時間目
　アマモ場とアマモについて理解する
4時間目
　アマモを育成する手順を理解する
5時間目
　観察する力を養う
6時間目
　大阪湾の生き物を知る

参加者の声

・アマモを増やすのは難しい。すぐ育つものだと思っていた。
・学校の近くの川のごみが海をよごしているから、ごみをひろおうと思った。
・アマモは海でやくだってすごい。海にいくごみをなくすためにごみをぽいすてしない！

兵庫県

遠阪川博士になろう！

基にしたモデル的なプログラム：川は自然の宝物、身近な自然と「水」と「生き物」のつながり、里山たんけん隊
作成団体：多摩市立連光寺小学校、特定非営利活動法人くすの木自然館、特定非営利活動法人きんたろう倶楽部
実証協力校等：丹波市立遠阪小学校

ESDの要素　多様性　連携性　責任性

能力／態度　多面　伝達　関連

プログラムの概要

学校に隣接する遠阪川（加古川源流）での生物リサーチ活動を実施する。「水生生物による水質判定」（環境省他）をテキストにするとともに、昔から地域住民が川水の「きれいさ」のシンボルとしてきたカジカ（カジカ科の淡水魚）を指標的生物と設定し、里山ビジターセンターである丹波市立青垣いきものふれあいの里の専門員や専門的な知識・技能を有する地域住民等の支援を受け、年間を通して、水質判定を行い、水のきれいさに関するリサーチ活動を行う。この活動を通じて、遠阪川のきれいさを認識し、守るために自分たちにできることを考え、友だちや地域住民と共に行動しようとする態度を養う。

プログラムの目標

①水生生物の採取及び観察する活動を通して、遠阪川の稀少種をはじめ生物種の多様性や、生物相互のつながりや関わり合いに気づかせ、生命を尊重しようとする態度を養う。
②年間を通して川での活動を行い、指標生物を基に水のきれいさを調査し、地域の良さを再発見するとともに、地域への愛着を深めさせ、ふるさとの自然を大切にしようとする態度を養う。
③地域指導者等の支援を受けて活動することを通して、ふれあいやコミュニケーションを深め、友だちや地域の人々と共に課題を解決しようとする態度を養う。

①2月　遠阪川調査
②地域の専門家と一緒に調査のふりかえり
③遠阪川は加古川の源流で、やがて瀬戸内海へとつながる

プログラムの流れ

1・2時間目
遠阪川を探検し、実際の川の様子やどんな生きものがすんでいるかなどの概要をつかむ
3～5時間目
遠阪川のきれいさについて、カジカなど指標生物を基に調査し、結果を発表する
6～9時間目
遠阪川のきれいさについて、調査を継続する
10・11時間目
一年間調査して分かったことをまとめる
12時間目
一年間調査して分かったことを発表する

参加者の声

・地域の人にカジカという魚はきれいな川にしかすめなくて、遠阪川にはすんでいるので、指標生物にしたらどうかと言われてうれしかった。
・きれいな水の生きものがいっぱいの遠阪川にするために、「川の調査を続ける。」「ごみを捨てない。ごみを拾う。」「地域の人に呼びかけ一緒になって川を守っていく。」をしていきたい。

奈良県

佐保に生きる～ビオトープを育てる

基にしたモデル的なプログラム：身近な自然と「水」と「生き物」のつながり
作成団体：特定非営利活動法人法人　くすの木自然館
実証協力校等：奈良市立佐保小学校

ESDの要素　多様性　相互性　責任性

能力／態度　多面　協力　関連

プログラムの概要

日常的な自然とのふれあいを通した時間的な命のつながりや命の大切さを実感させることを目的にしている。3月に新5年生にビオトープがバトンタッチされるところから学習はスタートする。4月に受け継いだビオトープを改善し、自分たちの手で育てることを目的に計画図を作成し、一年の見通しを持つ。そしてビオトープを育てながら四季折々の生き物探検を行い、命のにぎわいを感じさせている。もちろん、簡単な取組ではない。様々な努力をしても、生き物は増えていかず、なかなか思い描いているようなビオトープにはなっていかない。その体験を通して、自然への配慮や付き合い方を体感させたいと考えている。

プログラムの目標

①ビオトープを育てる活動を通して、自然への配慮、自然との付き合い方を身につける。
②日常的な生き物の観察により、空間的・時間的な命のつながりに気づくことができる。
③友達や地域の人たちと協働的に取り組むことで、コミュニケーション能力を高める。

①ヘドロをさらって、ビオトープをきれいに
②せせらぎを取り戻そう
③バタフライガーデンで草引き

プログラムの流れ

1時間目
環境カウンセラーを招いて、ビオトープについて学ぶ（5月）
2・3時間目
雑草を抜き、微生物を用いた土づくりを体験する（6月）
4・5時間目
専門家から、生物を用いた川の観察の仕方を教わり、川の生き物を観察する（7月）
6・7時間目
専門家の協力の下、ビオトープに住む水生生物を観察する（9月）
8・9時間目
バタフライガーデンにやってくる昆虫を観察する（10月）
10・11時間目
専門家の協力の下、紅葉の仕組みやそれぞれの樹木の特徴を理解する（11月）
12時間目
校区のビオマップづくり・ビオトープのよさや約束の立て看板づくり（3月）

参加者の声

・生き物が住める場所をつくることは難しい。今ある自然を大切にしたいと思う。
・一年を通して様々な生き物が移り変わっていくことが分かった。
・今まで生き物に興味がなかったけれど、生き物のことをもっと知りたいと思うようになった。

和歌山県

私たちのみはまの海を考える

基にしたモデル的なプログラム：身近な「水」と「生き物」のつながり、干潟の生き物観察から世界をみよう！
作成団体：特定非営利活動法人くすの木自然館、一般社団法人アーバンネイチャーマネジメントサービス
実証協力校等：和歌山県立みはま支援学校、和歌山県立自然博物館

ESDの要素　多様性　相互性　連携性

能力／態度　伝達　協力　参加

プログラムの概要

学校周辺の豊かな海岸で生物観察と調査を行い、過去の記録と比較して変化の様子を考察する。その際に温暖化の推移や近隣の森林の荒廃、地元漁業の問題を考え、海の生き物の変化や多様性の変化を学ぶとともに、人と自然の関係や自分たちの暮らしとの関わりについて考え、今後の環境変化の予想と個人でできる取組について学び、多くの人に知ってもらう必要性を実感する。その方法として口頭発表やポスター発表を通じてまとめ、伝えることの大切さと喜びを実感する。

プログラムの目標

①お互いに協力し、個性を尊重しあい、ひとつの作業を最後までともに行う。
②海の生き物の多様性と関わり合いと進化について学び、実感するとともに地元の海の豊かさを確認する。
③過去と現在の生物の変化を知り、原因を探って問題があれば解決策や対応策を考える。

1

2

3

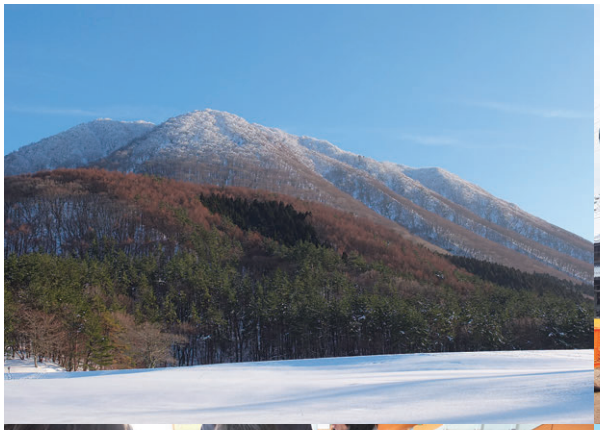
①野外活動の成果報告と専門家（博物館学芸員）によるアドバイス
②生物の同定と、生活との関わりについての講義
③全校集会でのプレゼンテーション

参加者の声

・これまで以上に多くの生物を観察できたこと、サンゴを確認できたことが大きな収穫でした。
・みはまの磯がとても生き物の多い場所だということがわかった。
・温暖化の影響で毒のある生き物が出てきたりしている。

プログラムの流れ

1・2時間目
フィールドワークの準備と生き物の探し方
3～5時間目
フィールドワークとその後の解説
6～11時間目
全校集会（口頭発表）と文化祭（ポスター発表）に向けたまとめ
12時間目
全校集会（口頭発表）と文化祭（ポスター発表）



中国ブロック

2014年10～11月に、岡山県岡山市で「ESDユネスコ世界会議」が開催されました。会議期間中には、世界97ヶ国・地域から約3,000名が岡山に集まり、これまでのESDの取組の成果、2015年以降のESD推進に向けた具体的な取り組みなどについて話し合われました。

中国ブロック

持続可能な地域づくりの“肝”

～地域で継続的にESDをすすめていくためには～

中国ブロックの概要

「環境教育×持続可能な地域づくり」

学校と地域の協働による学びの場づくりを通して、大人と子どもがいっしょに地域の未来について考え学びあいながら、豊かな地域づくりに向けた実践と担い手の育成に取り組みました。

ネットワークのポイント、特徴、工夫した点

「ESDコーディネーターの育成と協働促進」

中国各地においてESD・環境教育分野に取り組んでいる団体等を各県のコーディネーターとして、ワーキンググループの立ち上げや実証先の選定、地域性を活かしたESD環境教育プログラムの実証・検証を行いました。

また、各県のコーディネーターをはじめ、ESD・環境教育分野の有識者や教育・メディア関係者等から構成する実行委員会が、各県ワーキンググループの人材育成や事業展開のサポート、今後に向けた事業スキームの検討等を行うことを通して、事業の推進およびESDの普及・啓発を図りました。

①中国５県のESDプログラム実証のポイント
②実行委員会において事業推進体制を検討
③普及啓発イベント「ESD学びあいフォーラムin鳥取」の開催

地方事務局

NPO法人 ひろしまNPOセンター

実行委員メンバー

ブロック実行委員

所属	役職	氏名
人間科学研究所	所長	志賀　誠治
広島修道大学人間環境学部	准教授	西村　仁志
環境教育事務所Leaf	代表	河野　宏樹
株式会社中国新聞社	論説委員	金谷　明彦
中国環境パートナーシップオフィス	コーディネーター	岩見　暢浩

ワーキンググループ

地域	団体名 or 所属・氏名
鳥取県	特定非営利活動法人ECOフューチャーとっとり　山本ルリコ
島根県	公益財団法人しまね自然と環境財団　葭矢崇司
岡山県	岡山市京山地区ESD推進協議会　池田満之
広島県	公益財団法人広島市文化財団　為政久雄
山口県	公益社団法人日本環境教育フォーラム　徳永豊

問い合わせ先

環境省中国環境パートナーシップオフィス（EPOちゅうごく）
〒730-0011　広島市中区基町11-10　合人社広島紙屋町ビル5階
TEL：082-511-0720　FAX：082-511-0723

鳥取県

里山の恵みと暮らしを伝えよう！

基にしたモデル的なプログラム：自然の恵み（生態系サービス）を活用する体験学習（いぐねの学校）
作成団体：国立大学法人宮城教育大学　小金澤研究室（仙台いぐね研究会）
地域プログラム化メンバー：志子部地区モデル交流体験事業実行委員会、特定非営利活動法人ECOフューチャーとっとり、環境教育事務所Leaf
実証協力校等：志子部地区モデル交流体験事業実行委員会

ESDの要素　多様性　相互性　連携性

能力／態度　伝達　協力　関連

プログラムの概要

自然と共生する中山間地域の暮らしには、持続可能なライフスタイルの知恵が詰まっているものの、それを伝承する機会や担い手が課題となっている。そこで、街の子どもが山里の集落に出かけて、地元住民と交流しながら地域の伝統料理づくりを体験し、そこから見えてくる〝まちと農村〟〝昔と今の暮らし〟について理解すると共に豊かな心を育む機会とする。そして、中山間地域の魅力（人、暮らしの知恵、環境など）や課題を、まちの人たちに向けて発信する。

プログラムの目標

①伝統料理づくりの体験を通して、昔から継承されてきた暮らしや知恵、自分達の生活との違いを体感する。
②中山間地域に暮らす地元住民との交流を通して豊かな心を醸成するとともに、山里の暮らしの営みや地域課題について理解を深める。
③食と暮らしをテーマに、地域の魅力や課題を他者（家族、まちの人など）に伝える。

①臼と杵を使った初めてのお餅つき
②里山の恵みをいただく
③地域の魅力を発信するツールをつくる

プログラムの流れ

1時間目
地域を探検しよう
2～6時間目
伝統料理「かま焼き」をつくろう
7時間目
伝統料理を味わおう
8・9時間目
地域の暮らしを伝えよう①
10・11時間目
地域の暮らしを伝えよう②

参加者の声

・みんなで協力してかま焼きを作って食べて楽しかった。
・私たちはかぶとかもちとか、ほとんど買って食べるけど、志子部の人は自分たちで作ってすごいと思った。
・志子部のいいところを知ったから、わたしの地元のいいところを調べたいと思った。

島根県

昔ながらの暮らしから考える私たちの暮らし

基にしたモデル的なプログラム：自然の恵み（生態系サービス）を活用する体験学習（いぐねの学校）
作成団体：国立大学法人宮城教育大学　小金澤研究室（仙台いぐね研究会）
地域プログラム化メンバー：山村留学センター「三瓶こだま学園」（大田市教育委員会）、公益財団法人しまね自然と環境財団、島根県立三瓶自然館サヒメル
実証協力校等：山村留学センター「三瓶こだま学園」

ESDの要素　多様性　相互性　連携性

能力／態度　伝達　協力　関連

プログラムの概要

現代の生活は、利便性や快適性が追求された機器やエネルギーに囲まれているため、人間関係が希薄化したり暮らしの中で創意工夫する機会が減少している。本プログラムは、国立公園三瓶山の雄大な自然が広がる農山村を舞台として、小・中学生が地元住民といっしょに、竈や囲炉裏、箱膳など、地域に伝わる昔ながらの生活を体験し、伝統的な暮らしの中にある知恵や工夫について理解を深める。そして、自然環境と人間の暮らしのつながりから自分たちのライフスタイルを見つめ直す。

プログラムの目標

①竈や囲炉裏、箱膳、五右衛門風呂などを利用して昔の生活を体験し、自分達の生活との違いを見つめ直す。
②子ども達だけで力を合わせて生活し、お互いを思いやり協力する姿勢を養う。
③地域住民から昔の暮らしについての話を聞き、昔の生活の中にある知恵や工夫、思いやりを感じる。

①協力しながら五右衛門風呂を沸かす
②囲炉裏を囲んで昔ながらの生活を体験
③昔と今、田舎と街の暮らしの違いを考える

参加者の声

・昔の人の生活はとても大変だと思う。
・物を大切にしたいということと、むだづかいしないということ。
・自分は失敗したことがたくさんあるけど、三歩進んで二歩さがることを教えてくれて勇気をもらいました。

プログラムの流れ

1時間目
　昔暮らしを体験しよう①
2～5時間目
　昔暮らしを体験しよう②
6時間目
　昔暮らしを体験しよう③
7時間目
　昔の暮らしについて話を聞こう
8～10時間目
　昔暮らしを体験しよう④
11時間目
　今昔の暮らしを比べてみよう
12時間目
　昔暮らしから学ぶライフスタイルを実践しよう

岡山県

地球環境プロジェクト

～考えよう！地球のあした、行動しよう！身近なところから～

基にしたモデル的なプログラム：地球温暖化を学び学校の省エネを考える「フィフティ・フィフティ」プロジェクト
作成団体：特定非営利活動法人 FoE Japan
地域プログラム化メンバー：岡山市立津島小学校、特定非営利活動法人岡山NPOセンター、岡山市京山地区ESD推進協議会
実証協力校等：岡山市立津島小学校

ESDの要素　相互性　有限性　責任性

能力／態度　未来　多面　伝達

プログラムの概要

まずは身近な自然環境に目を向けるきっかけとして、学区内の河川で生き物観察や水質調査を行う。また、野外活動を通じた県内の他地域の環境を知る活動や、外部講師から地球温暖化問題の現状について学習することで、地球環境の大切さを理解し、自分たちができることを考え、夏休みの生活の中で地球温暖化対策を実践する。そして、その実践活動とそこから得られた学びを、写真や統計資料を効果的に取り入れたプレゼンテーションにまとめて、保護者や地域、他学年に向けて発表し、環境に配慮した行動を実践する仲間を広げていく。

プログラムの目標

①周囲の環境と関わって生きていることを理解し、身近な環境に対して自分との関わりという視点で興味・関心を持つ。
②地球全体の環境について考え、その保全の大切さを理解し、自分たちが何をしなければならないのかを考え、その思いを表現する。
③外部講師や地域の人たちとの意見交換を通して、環境問題に対する自分の考えを持つとともに、何か自分にできることを行動していこうとする態度を身につける。

①伝える力と情報リテラシーを身につける
②実践活動からの学びを保護者にプレゼン
③エコな生活を実践する仲間を広げるためのチラシ

プログラムの流れ

1時間目
　地域の環境を知ろう
2時間目
　県内の他地域の環境を知ろう
3時間目
　地球温暖化問題を探ろう
4時間目
　エネルギーなるほど体験
5時間目
　温暖化対策を整理しよう
6時間目
　みんなで実践してみよう
7時間目
　実践計画を立てよう
8時間目
　取り組んだ実践についての意見交換
9時間目
　プレゼンテーションを学ぼう
10時間目
　プレゼンテーションを準備しよう
11時間目
　保護者・地域に発表しよう

参加者の声

・私たちは地球1・4個分の資源を使っていて、このペースでいくと大変だということを知った。
・自分たちの生活を見直さないといけないことがよくわかった。
・保護者に発表をしっかり聞いてもらえてよかった。
・発表したことに興味をもってもらえてうれしかった。

広島県

このまちにくらしたいプロジェクト

基にしたモデル的なプログラム：公園、探検・発見ほっとけん！・・・誰が？
作成団体：幕張ベイタウンにエコパークをつくる会
地域プログラム化メンバー：広島市立古田中学校、広島市古田公民館、ふるた多世代寺子屋（NPO法人もちもちの木）
実証協力校等：広島市立古田中学校、広島市古田公民館

ESDの要素　多様性　連携性　責任性

能力／態度　未来　多面　伝達

プログラムの概要

価値観やライフスタイルの多様化に伴い、現在の公園は危険や騒音の問題などを抱え、地域の環境の変化に適応できないまま、利用規制などにより公園の利用度を減少させている実態がある。そこで、公園の現状やあそび場づくりの事例を学ぶとともに、地域の公園の利用実態などを調査することで、自分たちの身近な公園が抱えている課題を知り、その解決方法を考える。そして、みんなが幸せに使える公園・あそび場の実現に向けて、地元住民の声を集め、公園を活用したイベントを企画実施する。

プログラムの目標

①地域の公園の調査・研究を通して、公園の役割や地域の公園が抱えている課題を知り、その解決方法を探る。
②中学生が地域住民と持続可能な地域づくりについて共に学び、多世代が共感できるコミュニティのあり方を考える意識を養う。
③このまちにくらしたいというテーマのもとに、社会の課題と身近な暮らしを結びつけ、新たな価値観や行動を生み出す。

①みんなが幸せに使える公園のアイデアを考える
②地元住民の声を聴いて公園のニーズを調査
③中間発表を通して企画をブラッシュアップ

参加者の声

・多世代の人たちと交流できてよかった。
・大好きなまちのために何か小さなことでもすることができてうれしい。この街のために何かしたいと思えるようになった。
・育った町のことなのに知らないことがたくさんあったので、もっと知りたいと思いました。

プログラムの流れ

1時間目
みんなが使える公園・あそび場を考えよう＜問題に気づく＞
2時間目
あそび場づくりの現場を見学する＜体験する＞
3時間目
今年度の行動計画を考えよう＜計画する＞
4時間目
公園・あそび場づくりに関わる人から学ぼう＜詳しく知る＞
5時間目
地域の公園の利用実態やニーズを調査しよう①＜声を聴く＞
6時間目
地域の公園の利用実態やニーズを調査しよう②＜声を聴く＞
7時間目
地域の公園の利用実態やニーズを調査しよう③＜声を聴く＞
8時間目
公園の活用アイデアを提案しよう＜仲間を広げる＞
9時間目
公園の活用提案イベントを企画しよう①＜アイデアを生み出す＞
10時間目
公園の活用提案イベントを企画しよう②＜アイデアを生み出す＞
11時間目
公園の活用提案イベントを実施しよう＜行動する＞

山口県

これからのまちとくらしを考える子どもワークショップ

基にしたモデル的なプログラム：環境ウォッチングで提案づくり
作成団体：公益財団法人　公害地域再生センター（あおぞら財団）
地域プログラム化メンバー：周南市立三丘小学校、スリーヒルズ・アソシエイツ、人間科学研究所
実証協力校等：周南市立三丘小学校

ESDの要素　相互性　連携性　責任性

能力／態度　未来　伝達　協力

プログラムの概要

少子高齢化や過疎化が進み、小学校の存続が危ぶまれている中で、大人は〝ずっとこどもがいるまちプロジェクト〟を立ち上げ、定住促進等の活動を展開している。しかし、そこにはこれからの地域づくりを担う次世代の参画が課題となっている。そこで、子ども達自身も、自分たちが暮らすまちを探検してみたり、地域の人に話を聞いたりしながら、まちの良いところやなんとかしたいところを探って、こんなまちにしたい！を子どもの目線で大人に提案する。

プログラムの目標

①三丘地域の現状を知ることを通して、地域の魅力や課題、地域と自分のつながりについて実感する。
②三丘地域が子どもにとって住みやすい地域になるために何が必要かを考え、協力しながら課題を解決する力を養う。
③子どもにとって住みやすい三丘地域にするためのプロジェクトを地元住民に提案する。

①タウンウォッチングで地元住民の想いを聴く
②こんなまちになったらいいな！をみんなで考える
③子ども目線のまちづくり提案を保護者や地元住民に発表

プログラムの流れ

1時間目
　私とまちのつながりを考えよう
2時間目
　タウンウォッチングに出かけよう①
3～5時間目
　タウンウォッチングに出かけよう②
6時間目
　タウンウォッチングの結果をまとめよう
7時間目
　こんなまちにしたいを考えよう
8時間目
　こんなことできたらいいなを考えよう
9・10時間目
　提案プロジェクトを企画しよう
11・12時間目
　まちの人に提案しよう

参加者の声

・みんなでまちを探検したことが楽しかった。
・大人も子どももみんなが楽しくできる場所をつくりたい。
・発表をたくさんの人に聞いてもらえてよかった。プロジェクトをまちの人といっしょにかなえたいと思います。

解説【4】学校における環境教育とＥＳＤへの取り組み

環境教育のねらいは、持続可能な社会づくりに貢献する人材の育成です。持続可能な社会は、環境だけでなく、社会的公正や経済など幅広い領域と関係することから「持続可能な開発のための教育（Education for Sustainable Development=ESD）」ととらえ、多分野の教育を積極的に結びつけて取り組む必要があります。

発達への配慮

小学校低学年では、体験や感性が重要であり、学年が上がるに従い、課題発見と解決の実践力、行動を通じた思考・判断能力と、重点となるねらいが変化します。

また、環境教育では、課題を発見し、取り組み、結果をふりかえる一連の過程を経て、さまざまな能力が身につくよう設計することが重要です。

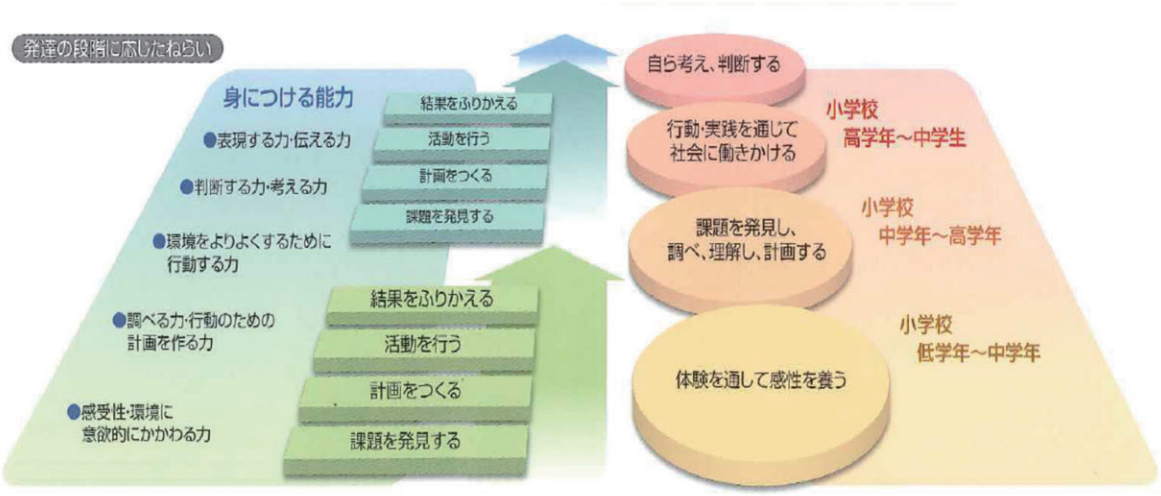
学校全体での取り組み

環境教育には、学校全体で取り組むことが不可欠です。各学校の目標、目指す児童・生徒像を踏まえたうえで、全教職員が環境教育にどのように取組、実践するかについて共通理解しておく必要があります。また、学年間・教科間での連携を積極的に図ることにより、環境教育の効果はより高められると期待されます。

地域・家庭とのかかわり

特に児童にとっては、地域の身近な問題に目を向けた内容を取り上げ、身近な活動から学習を始めることが有効です。

また、環境保全のための取り組みは、日常生活の中でも意識的に行っていくことが求められています。家庭や地域社会と積極的に連携し、学校で学んだことを家庭や地域社会での生活に生かすことができるよう配慮することが必要です。



環境省「授業に活かす環境教育－ひとめでわかる学年別・教科別ガイドー」より

四国ブロック

四国ブロックでは、各県ごとに学校、NPO、行政、企業、メディアなどの多様なメンバーでワーキンググループを構成し、「水」「生物多様性」「防災」「生命」など、地域の特色を活かしたプログラムを展開しました。

持続可能な地域づくりの“肝”

～地域で継続的にESDをすすめていくためには～

四国ブロック

四国ブロックの概要

「参画と推進のためのESD仲間づくり」

ESDが地域に根差した取組みになるよう、各県実行委員会・ワーキンググループ、検証作業部会を設置してプログラムの作成・実証、評価方法の検討を行うとともに、メディアと連携したDVD作成に力を入れました。

①

②

③

①第2回実行委員会
（ESD推進のためにDVD作成の打合せ）
②第3回実行委員会
（ESDユネスコ世界会議の報告）
③第3回実行委員会
（愛媛県新居浜市）

ネットワークのポイント、特徴、工夫した点

「多様な主体との連携で地域で根ざすESDを目指す」

今回、四国地域版ESDプログラムを作成するに当たっては、実証後も継続して地域で根ざすESDの取組みが行われるよう、学校、教育委員会、メディア、NPO、大学、自治体等の人・組織や仕組みの相互作用を活用しながら実行委員会・ワーキンググループを形成しました。

各主体間の連携強化を図りつつ、各県毎のワーキングチームで実証校と検討を重ねプログラム作成・実証を行い、評価についても議論を深めました。これらESDの実証を通じて地域でESDの取り組みを拡げるため、メディアと連携してDVDの作成を行いました。また、俳句・川柳・メッセージを募集するなど、小中学校だけでなく、公民館を含む一般の方にも働きかけました。

地方事務局

NPO法人 えひめグローバルネットワーク

ブロック実行委員/ワーキンググループ

地域	委員・所属
徳島	近森憲助（鳴門教育大学副学長）、小澤大成（鳴門教育大学大学院教育研究科教授）、細川威典（阿南市立羽ノ浦中学校校長） 山崎順一（特定非営利活動法人徳島環境カウンセラー協議会環境カウンセラー）、三木孝司（合資会社AMSコンサルティング代表取締役）、丸岡美枝（三好市立池田中学校教諭）
香川	原直行（香川大学経済学部教授）、井上修（善通寺こどもエコクラブ代表）、池田裕晃（善通寺市役所市民部生活環境課課長）、森永博文（株式会社ビジネスインテグレータ）、細川和浩（善通寺市立西中学校教諭）
愛媛	羽鳥剛史（愛媛大学大学院生産環境工学専攻環境工学教授）、竹下浩子（愛媛大学教育学部准教授）、渡部寛志（特定非営利活動法人えひめ311代表理事）、芳野昌宏（公益財団法人松山国際交流協会総務課課長）、鈴木靖彦（JAえひめ中央総合企画室リスク管理課）、山内孝雄（南海放送株式会社営業局営業部部長）、間部量吉（松山市立新玉小学校校長）、堀内節子（松山市立新玉小学校教諭）
高知	八田章光（高知工科大学システム工学群教授）、山﨑三郎（アサギマダラの里in秋葉山事務局長）、坂山英治（四万十町立窪川小学校校長）、山本作（高知県林業振興・環境部新エネルギー推進課チーフ）、押岡茂紀（株式会社西日本科学技術研究所）、笹岡高志（株式会社RKCプロダクション代表取締役）、濱口佳太（高知県森林研修センター情報交流館施設長）

検証作業部会

地域	所属・氏名
徳島県	近森憲助（鳴門教育大学）、小澤大成（鳴門教育大学大学院教育研究科）
香川県	原直行（香川大学経済学部）
愛媛県	羽鳥剛史（愛媛大学大学院生産環境工学専攻環境工学）、竹下浩子（愛媛大学教育学部）
高知県	八田章光（高知工科大学システム工学群）
	常川真由美（四国環境パートナーシップオフィス）

シンポジウム準備部会

団体名
新居浜市教育委員会
新居浜市公民館連絡協議会
えひめグローバルネットワーク

問い合わせ先

環境省四国環境パートナーシップオフィス（四国EPO）
〒760-0023　香川県高松市寿町2-1-1高松第一生命ビル新館3階
TEL：087-816-2232　　FAX：087-823-5675
E-mail：4epo@4epo.jp

高知県

アサギマダラの飛来する魅力ある地域づくり

基にしたモデル的なプログラム：赤とんぼを通して地域の良さを見つけよう。
作成団体：勝山市立荒土小学校
地域プログラム化メンバー：高知工科大学、アサギマダラの里in秋葉山、四万十町立窪川小学校、高知県林業振興・環境部新エネルギー推進課、株式会社西日本科学技術研究所、株式会社RKCプロダクション、高知県森林研修センター情報交流館、香美市立片地小学校
実証協力校等：香美市立片地小学校

ESDの要素　相互性　有限性

能力／態度　批判　伝達　参加

プログラムの概要

アサギマダラについて知っていることや疑問などを出し合い、専門家にその生態やマーキングの方法、その狙いなどを学ぶ。その後、アサギマダラが飛来する里山において捕獲、観察、記録、マーキングをするとともに、周辺の自然環境を観察し、生態系等についても学ぶ。卵や幼虫の数、大きさの変化を記録することで、命の大切さなどに気づく。また、地域の人から里山（秋葉山）の歴史、文化を聞き、一緒に地域の米や水でご飯を炊き、おにぎりを作り味わう中で地域の魅力やつながりを意識する。これらの体験をふまえ、自分たちがこれから大切にしたいことをわかりやすく伝えるため、協力し合ってまとめ、地域の人や全児童に対して発表する。

プログラムの目標

①アサギマダラが卵から蝶になるまでの観察を通して、その一生に関連する事柄へ関心を持ち、地域の多様な自然環境の認識や探究する力を育てる。
②生き物の成長する過程で命を大切にする心を育てる。
③地域の人や環境保全団体等のお話を聞いて交流する中で、地域の魅力に気づくと共にコミュニケーション力や共感力を育てる。
④他の児童と協力し合い、学んだことや大切にしたいことをまとめ、他の人に伝える力を育てる。

①地域の山で、アサギマダラの卵・幼虫を観察
②飛来したアサギマダラを捕獲
③NPOの方からアサギマダラの生態について学ぶ

プログラムの流れ

1時間目
　コンセプトマップを作ろう！
2時間目
　アサギマダラの生態について知ろう！
3・4時間目
　アサギマダラのマーキングをしよう！
5・6時間目
　アサギマダラの産卵状態を観察しよう！
7時間目
　秋葉山と地域のつながりを知り、これからの行動を考えよう！
8・9時間目
　考えをまとめ、発表の準備をしよう！
10時間目
　発表しよう！

参加者の声

・卵があってびっくりしたけどがんばって生きてほしいと思った。
・僕のマーキングしたアサギマダラが奄美大島まで飛んだ。
・アサギマダラの一生には土や水、雨も、木や植物を通して関係していることがわかった。

香川県

山・里・まちのつながりから未来を考えよう

～善通寺弘田川調査からわかること～

基にしたモデル的なプログラム：「生き物たちとの持続可能な社会を考えよう」（自然調和型社会学習プログラム）
作成団体：岡崎市立新香山中学校
地域プログラム化メンバー：香川大学、善通寺こどもエコクラブ、善通寺市民生部環境課、善通寺市教育委員会、善通寺市立西中学校
実証協力校等：善通寺市立西中学校

ESDの要素　多様性　相互性　連携性

能力／態度　多面　伝達　関連

プログラムの概要

昔の生活の中に見られた生物について、祖父母から聞き取り、現在いなくなった生物の要因を考える。「レッドデータブック」などを使って、身近な生物で絶滅の危機に瀕している生物を調べ、リストに載っている生物を確認するとともに、問題視されながらも改善されていない理由を考えた。学校周辺の弘田川で環境調査をして、持続可能な社会のためにまちの中にどのような自然が必要なのか、現状と環境改善のヒントを探る。これまでの調査から、共生社会のイメージについて考え、人間と生き物の「棲み分け」が共生社会のキーワードであることに気づき、自分たちがやってみたい活動を発表する。

プログラムの目標

①外来種から地域の生態系を守る。絶滅危惧種に対する環境変化を理解する。
②持続可能な社会のためにまちの中にどのような自然が必要なのかを想像する。
③人間と自然がどう共生するとよいのかという視点からのまちづくり（生物多様性）。

①学校近くの弘田川の現状を知るために川に入って観察
②採取した生物を観察
③昔いた生き物、現在いる生き物を友だちと話し合って分類

参加者の声

・メダカなど身の回りで絶滅が危惧されている動植物がいることが今までよりもわかった。
・全体発表についてみんなと協力してしっかり取り組めたと思う。
・今の生活のままでは持続可能な社会をつくることは難しいと思った。

プログラムの流れ

1時間目
地域の自然を調べよう！
日本の自然を山・里・まちにつなげてみる
今と昔の生き物について学ぶ
2・3時間目
（川の調査）フィールドワーク
4時間目
持続可能な社会のための行動をしよう！
持続可能な社会のためにまちの中にどのような自然が必要なのかを考え発表する

愛媛県

よいまちつくろう ～菜の花プロジェクト～

基にしたモデル的なプログラム：みんなでつくろう！防災コミュニティファーム　～まちなかの公園が地域を守る農園に！？～
作成団体：国立大学法人愛媛大学
地域プログラム化メンバー：愛媛大学大学院、愛媛大学、特定非営利活動法人えひめ311、公益財団法人松山国際交流協会、JAえひめ、南海放送株式会社、南海放送サービス株式会社、松山市立新玉小学校
実証協力校等：松山市立新玉小学校

ESDの要素　相互性　連携性

能力／態度　多面　伝達　関連

プログラムの概要

地域の玄関口であるＪＲ松山駅の利用者に笑顔になってほしいという思いから、児童が自分たちにできることを考え、菜の花の栽培を行った。専門家の指導を受けながら土づくり、種まき、水やり、草抜き、間引きなどの作業を体験し、植物の成長を観察した。さらに、ＪＲ駅職員の協力のもと「駅探検」を実施し、駅構内のどの場所に菜の花のプランターを飾るかアイデアを出し合うなど、地域の人々と交流しながらプログラムを展開した。また、食用菜の花の栽培により、間引いた菜の花をお粥・雑炊にして食べる体験が可能となり、防災時における菜の花の活用方法について学ぶ。

プログラムの目標

①校区にあるＪＲ松山駅をより明るい場所にして、地域の方々の心を和ませることができるよう、自分たちができることを考え、実践する。
②地域や専門機関の多くの方と触れ合う中で、地域との関わりを深め、地域への愛着を持つことができる。
③菜の花を種から育てる活動を通して、植物の成長の仕方を観察するとともに、生命の尊さを感じ大切にする心を育むことができる。

1

2

3

①菜の花の種を植える
②みんなで育てた菜の花を、JR松山駅に飾る
③間引きした菜の花で、お粥・雑炊を作って食べる

プログラムの流れ

1時間目
　菜の花の種まき
2時間目
　菜の花の間引き
3時間目
　他の駅の様子を知る
4・5時間目
　松山駅の探検
6時間目
　東北の菜の花プロジェクトの話、菜の花のお粥・雑炊体験
7・8時間目
　菜の花を松山駅に飾る
9時間目
　菜の花回収、これからの取り組みにむけて

参加者の声

・世界にはいろいろな駅があることが分かった。そして駅は、足が不自由な人、目が見えない人、外国の人などいろいろな人が使う場所だということが分かった。これからは、自転車は自転車置き場にきちんと置いて、目が見えない人の邪魔にならないようにしたい。
・菜の花は見た人が元気になる花だという話を聞いて、松山駅に菜の花を飾ることで駅が明るくなり、駅を利用する人みんなが気持ちよくなってほしいと思った。
・菜の花の雑炊は少し苦かったけどおいしかった。雑炊のほかにどんな食べ方があるか、おばあちゃんに聞いてみたい。

徳島県

暮らしの中の水を見つめ直そう

～アフリカから学ぶ、ふるさとの安全な水と豊かさ～

基にしたモデル的なプログラム：命の水　–開発途上国の子どもの問題を「水」を通して学ぶ–
作成団体：あいち国際理解教育ステーション（AIS）
地域プログラム化メンバー：鳴門教育大学、鳴門教育大学大学院、阿南市立羽ノ浦中学校、NPO法人徳島環境カウンセラー協議会、合資会社AMSコンサルティング、三好市立池田中学校
実証協力校等：三好市立池田中学校

ESDの要素　多様性　公平性　責任性

能力／態度　伝達　協力　参加

プログラムの概要

アフリカの子どもが描いた絵や現地の写真を通して、子どもの暮らしの中の安全な水や必要な量の確保の現状を知ると共に、その役割を子どもが担っており、家の中での仕事があることについて自分の生活との違いを認識する。アフリカの歴史や文化、経済を学ぶ中で、遠いアフリカの暮らしを知ると同時に、自分たちの身近にある吉野川の水について知ることで、これから自分たちでできることや伝えたいことについて考え、主体的に取組む行動について話し合いを行う。

プログラムの目標

①日本から遠く離れたアフリカでの現状を知り、体験を通して関心を持つ。
②自分の暮らしを見つめ直し、「水」の大切さを再認識する。
③身近に流れる地域の川の良さを知り、地域への愛着を深める。
④自分たちができる環境行動を文字や絵で表現し、行動につなげる。

①みんなで話し合って集計
②アフリカの水事情に共感するために水を運ぶ体験を実施
③社会科の授業でアフリカの歴史を学ぶ

プログラムの流れ

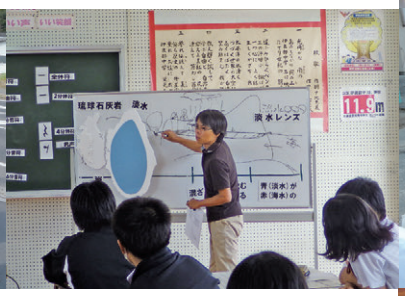
1時間目
写真から読み取れることを話し合おう
2時間目
1日の水の使い方について考えよう
3時間目
アフリカの自然環境・歩みと文化について学ぶ
4時間目
植民地支配の歴史と産業の関わりについて学ぶ
5時間目
アフリカの現状を知る
6時間目
自分たちでできることを考えて、行動しよう

参加者の声

・水運びをしなくても勉強できるありがたさを忘れずに、このような環境や人々がいることを周りの人に伝えていきたい。（子ども）
・ESDを広めるために平和・人権・多様性などをみんなが意識することが重要。（先生）

ひろげよう 九州のチカラ
つなげよう 私たちの未来(アシタ)

EPO 九州



九州ブロック

各地域特有の課題を考えながら、「今、自分たちが出来る事を考えよう！」と子どもたちが想いえがくの授業が展開されました。

九州ブロック

持続可能な地域づくりの“肝”

～地域で継続的にESDをすすめていくためには～

九州ブロックの概要

「ひろげよう九州のチカラ」

九州・沖縄ならではの地域に根ざしたＥＳＤプログラムの実証と展開が出来るようにＥＳＤ・環境教育分野に関する専門家、行政関係者、メディア関係者、各県ワーキンググループ代表者で構成された実行委員会で積極的に意見交換を行い、繋がりの強化を図っています。

ネットワークのポイント、特徴、工夫した点

「つなげよう私たちの未来（アシタ）」

日頃から各県で地域に根ざした環境教育・ＥＳＤプログラムを展開しているＥＳＤ活動型のＮＰＯ等が構築してきた教育系、環境系の繋がりをもとに、教育専門家や実証校に呼びかけを行い、各県ワーキンググループメンバーの一員に加わりＥＳＤ活動の強化をはかっていきました。また、各県で行われたワークショップにもＥＳＤの展開をより理解してもらうため学校関係の先生方への参加を呼びかけました。将来的に、各県からＥＳＤモデル校が誕生し各地域のニーズに応じたカリキュラムが展開されていくネットワークづくり第一歩としました。

①盛んな意見交換の行われた実行委員会
②・③福岡県、熊本県で開催された環境系イベントでの啓発活動の様子

地方事務局

株式会社フラウ
EPO九州

ブロック実行委員

所属	役職	氏名
熊本県立大学	名誉教授	篠原　亮太
北九州市立大学	法学部　教授	三宅　博之
福岡教育大学	教育学部　教授	平尾　健二
福岡県環境部環境政策課	企画広報監	池田　光政
福岡県教育庁教育振興部義務教育課	主任指導主事	太田　卓也
トミタプロデュース	代表	富田　剛史
西日本新聞社　編集局生活特報部	編集委員	佐藤　倫之
各県ワーキンググループ代表		

ワーキンググループ

地域	団体名
福岡県–福岡地区–	株式会社フラウ
福岡県–北九州地区–	青い地球の会ブルーアース
佐賀県	認定ＮＰＯ法人地球市民の会
長崎県	ＮＰＯ法人環境カウンセリング協会長崎
熊本県	一般社団法人アイ・オー・イー
大分県	認定・指定特定非営利活動法人地域環境ネットワーク
宮崎県	一般社団法人てるはの森の会
鹿児島県	ＮＰＯ法人くすの木自然館
沖縄県	一般財団法人沖縄県公衆衛生協会

問い合わせ先

環境省九州環境パートナーシップオフィス（EPO九州）
〒860-0806　熊本市中央区花畑町４－８　熊本市国際交流会館２F
TEL　096-312-1884　　FAX　096-312-1894

福岡県

地球救命隊

～守れ!!　日本の森林！～

基にしたモデル的なプログラム：木のパワーを探ろう！～使って守る森と住まい・まちの創造人材育成～
作成団体：一般社団法人日本建築学会
地域プログラム化メンバー：九州大学大学院芸術工学研究院、福岡県農林業総合試験場資源活用研究センター、NPO法人グリーンフォレスト福岡、福岡市立百道浜小学校、株式会社フラウ
実証協力校等：福岡市立百道浜小学校

ESDの要素　有限性　連携性　責任性

能力／態度　多面　関連　参加

プログラムの概要

化石燃料等限りある資源は「節約して守る」の意識が子どもたちには強いが、森林保全とは単に森林を守る事でなく、木を有効に伐採し「消費」し新しく植樹をしていく循環システムが森林の環境保全につながる事を理解するプログラム。そのために、子どもたちが「今、自分たちができることは何か？」を発見する。また、保全活動や林業を営む方をゲストティーチャーとして迎え、学校の授業では決して教わる事のない実際の話しを聞く事で、森林保全活動の内容を知ってもらう事とあわせて、林業を産業として成り立たせる事が重要な事の理解を深める。最終的に子どもたち一人ひとりが8ページの小冊子を作り上げる。

①ワークショップでは初めて聞いたり体験することばかり
②子どもたちの調べ学習や想いが形になる

プログラムの目標

社会科と総合的な学習の時間を利用する事で、通常、産業として学ぶ林業を別の視点で学びながら森林保全と循環システムを理解する。
①持続可能な資源である木材の現状と身の廻りでの関わりについて考える。
②木を育てる事と使う事の循環システムが森林保全に重要である事を学ぶ。
③消費者の一員として、森林資源と自分自身の関わりについて考え、自分たちが出来る事を見つけだす。
④森林保全や林業に関わる方の話しを直接聞き、様々な視点から環境保全を学ぶ。
最終的に1つの答えを見つけ出すのではなく「山っていいよね。木材っていいよね。」と思うようになり、興味・関心を持ってもらう事を目標とする。

参加者の声

・実際に活動されている方の話には、想いがあり説得力がある。意欲も高まったし、理解が深まった。
・教師では到達できない専門性を知ることでより理解が深まった。
・実際に講師の先生が来てくれて私たちに一生懸命に話しをしてくれたことで森林の大切さ、森林の役割をどのように活かしているかが知れたこと。
・ワークショップで最後に廻った先生の言われた言葉が心にのこりました。それは「好きなことをやっていると自然と道が開ける。」と言う言葉です。

プログラムの流れ

1・2時間目
国土保全のための森林資源の働きと森林を守る林業の仕事を知ろう！
3・4時間目
日本の森林や林業の現状に関して調べてみよう！
5・6時間目
調べた事を発表してみんなで討論しよう！
7・8時間目
間伐、枝打ち、間伐材を使った工作など木を体験しよう！
9・10時間目
ワークショップで森林を守る仕事に携わる人の話しを聞こう！
11・12時間目
学習したことをパンフレットにまとめよう！

佐賀県

私たちの新校舎：コミュニティ・ルームをもとに北川副町について考えよう

基にしたモデル的なプログラム：目指せ！特級エコガイド～冬の校舎の秘密　劇的改造エコブリッジ　ビフォーアフター～
作成団体：豊田市立土橋小学校
地域プログラム化メンバー：佐賀大学、佐賀市立北川副小学校、北川副地域学校運営協議会、佐賀ユネスコ協会、特定非営利活動法人 温暖化防止ネット、佐賀県環境課、佐賀市教育委員会、特定非営利活動法人地球市民の会
実証協力校等：佐賀市立北川副小学校

ESDの要素　多様性　相互性　連携性

能力／態度　未来　関連　参加

プログラムの概要

実証協力校である北川副小学校は今年度、新校舎が完成する。この校舎は、環境やUD（ユニバーサル・デザイン）に配慮したすばらしい建物となっている。また、文部科学省のコミュニティ・スクール指定校であるために、地域住民も利用することのできる多目的室として「CR（コミュニティ・ルーム）」を新設している。子どもたちには、旧校舎と新校舎を比較しながら環境に配慮されている点を学ぶとともに、CRの有効な活用方法を考えながら、ひいては自分たちの地域である北川副町について学ぶプログラムである。

①新校舎の建物について子どもたちは真剣！
②ＣＲの活用を地域の方々といっしょに学ぶ

プログラムの目標

①校舎改築となった新校舎を教材にし、新校舎は地域のさまざまな願いがこもっていることや、環境に配慮していること、UD（ユニバーサル・デザイン）であることなどを理解することができる。
②新校舎内のCR（コミュニティ・ルーム）の存在に気づき、その活用について模索しながら、地域との連携の必要性や大切さを考えることができる。
③理解したことをさまざまな方法でまとめ、いろいろな人にその内容を伝えることで、伝えることの喜びとその成果に気づく。また、更なる学びへの意欲を高める。

プログラムの流れ

ステップ1
　新校舎って、どんな校舎になるのだろう
ステップ2
　どんな校舎だといいのかなあ
ステップ3
　新校舎の秘密を教えてもらおう
ステップ4
　見学してみよう
ステップ5
　学んだことを伝えよう
ステップ6
　新校舎で学ぶ時のルールを考えて、実行しよう
ステップ7
　家庭や地域でも活用できる内容はないだろうか

参加者の声

・教室の中が佐賀県の木でできていました。ぼくはこの教室にいると人間が自然を大切にするのは自分たちがその一部なのだから当たり前なんだと思いました
・新しい校舎は僕たちが夏でも勉強しやすいように熱さ対策がされています。この校舎へのたくさんの人の思いに報いるために、温暖化がこれ以上進まないようにさせなければならないんだと思いました。

環境問題と生活のつながりを知り、科学技術で未来をひらこう！

基にしたモデル的なプログラム：地球温暖化を学び学校の省エネ考える「フィフティ・フィフティ」プロジェクト、レッツゴー！エコキッズ、これからのエネルギー生活を考えよう～電気に頼りすぎた生活を見直そう～
作成団体：特定非営利活動法人FoEJapan、富士市立中央小学校、三環の会（なごや環境塾三期生の会）
地域プログラム化メンバー：NPO法人環境カウンセリング協会長崎、長崎大学、長崎市立高城台小学校、長崎総合科学大学
実証協力校等：長崎市立高城台小学校

長崎県

ESDの要素：多様性 相互性 有限性 公平性 連携性 責任性

能力／態度：批判 未来 多面 伝達 協力 関連 参加

プログラムの概要

5年生児童が総合学習で学んだ「環境問題」の中から各自が興味関心のあるテーマで作り上げた「環境新聞」をベースにして環境問題テーマの12分野内容を包含し、記憶した知識から自らがもっと関心をもち、専門家の話しを聞き、実験を通して体感し、気づき、行動につなげるプログラム構成とした。

プログラムの目標

①太陽光エネルギーの理解
②暮らしとエネルギー
③便利な生活と大量廃棄物の理解
④中国と日本の比較
⑤酸性雨
⑥自動車の二酸化炭素排出量
⑦生活で使う水と川の汚染との関係
⑧温暖化と水問題
⑨植物の生存競争
⑩温室野菜栽培のためのエネルギー使用量とフードマイレージ
⑪地球温暖化の現状
⑫電気エネルギーをつくる大変さを体感し、省エネルギー等を考えさせる
⑬長崎県のゴミの現状と4R
⑭まとめ
で構成した。

①自転車発電に先生がトライして盛り上がる様子
②生徒たちの真剣なまなざし

プログラムの流れ

1～4時間目
「地球温暖化」や「環境問題」について資料で調べる
図書館や本やパソコンで調べる
5～8時間目
「環境問題を考えよう！」で自分の関心あるサブテーマを決める
9・10時間目
自分のテーマで「環境新聞」をつくり発表する
11・12時間目
環境問題と生活の繋がりをしり、科学技術で未来をひらこう！

参加者の声

・手回し発電機や自転車などで、力いっぱいやっても豆電球がつくぐらいなのに自分は電気つけっぱなしだったりコンセントにさしっぱなしだったりしていたからもったいないことをしたと思った。
・ふだん何気なく行っていることでも電気が使われていることを知りました。また、私たちが少し我慢するだけで、エネルギーが使われずにすむことを学びました。

くらしマイレージ講座

基にしたモデル的なプログラム：くらしマイレージ講座
作成団体：NPO法人環境ネットワークくまもと
地域プログラム化メンバー：熊本大学、NPO法人環境ネットワークくまもと、学校法人尚絅学園尚絅中学・高等学校、九州環境パートナーシップオフィス、一般社団法人アイ・オー・イー
実証協力校等：学校法人尚絅学園尚絅中学校

熊本県

ESDの要素 有限性 連携性 責任性

能力／態度 未来 多面 参加

プログラムの概要

単にフード・マイレージを調べたり理解するだけでなく、熊本で古くから栽培されてきた「ひご野菜」について紹介し、県産の伝統野菜や日常生活における食とのつながりに、生徒自らが気づけるように工夫する。

エネルギー学習では、普段地域で目にしている自然エネルギーについての学習も行い、身近な問題としての意識付けを行う。また、県内の企業を訪問・見学し、太陽光発電等によって社内で使用する電気自給率100%を実現した様子を知る機会を作る。さらに同社の社員食堂の生ゴミを堆肥化し、その堆肥で野菜の生産を行う活動など、エネルギーや食の循環を間近で見ることによって、自分たちの生活をふりかえり、また見直すためのきっかけづくりとなるよう工夫する。

プログラムの目標

①地球環境問題の中の「地球温暖化問題」について概要把握をする。
②私たちの日々の「暮らし方」について現状把握をする。
③フード・マイレージについて理解する。
④地球温暖化の主な原因となるCO_2を排出する化石燃料に対し、排出の少ない自然エネルギーを使うことが有効であることに気づかせる。
⑤地域資源を有効活用してエネルギーを作る「創エネルギー」、また日々の暮らしでCO_2削減につながる「省エネルギー」についても気づかせる。
⑥「暮らし方」を考え直すコツや材料が身近にあることに気づかせる。
⑦持続可能な地域づくりにむけた具体的行動計画づくりと実践行動を実施していく。

参加者の声

・地域のNPO等と連携して授業に取組むことで、多様な専門的（本物）なプログラムに参加できる点で生徒たちに効果があると考える。
・地域や学校において、ESD・環境教育を普及促進して行くためには、目的や課題を設定して実践したことを定期的に検証して、継続していくと共に、広報したり、仲間を広げていくことが大事だと考える。
・省エネルギーと創エネルギーについて学べたのが心に残りました。

①お弁当づくりワークショップでフード・マイレージについて学ぶ
②日常の暮らしの中で、自分たちにできる具体的なアクションプランを発表

プログラムの流れ

1時間目
地球温暖化について学ぶ
2時間目
毎日の自分の生活をチェックしよう！
ライフスタイルチェックをやって気づいたことは何？
ライフスタイルチェックの集計結果から、課題を解決するにはどのような工夫が必要だろう
3時間目
毎日食べている食事からCO_2削減を考えよう！
4時間目
お弁当の食材からフード・マイレージを考えよう
5時間目
お弁当の学習から分かったことを発表しよう
6時間目
新エネルギーの利用について考えよう
7～9時間目
生活に必要なエネルギーからCO_2削減を考えよう！
10・11時間目
「くらしマイレージ」についてアクションプランを考えよう！

大分県

校庭の木から学ぶ、木と人の暮らし

基にしたモデル的なプログラム：エコシステム学習プログラム、木のパワーを探ろう！～使って守る森と住まい・まちの創造人材育成～、森林プログラム（いなぎの森100年プロジェクト）
作成団体：青い地球の会ブルーアース、一般社団法人日本建築学会、東京都稲城市立稲城第一小学校
地域プログラム化メンバー：大分大学、小国町森林組合、ＮＰＯ法人グリーンインストラクターおおいた、うーたの会、大分生物談話会、認定・指定特定非営利活動法人地球環境ネットワーク
実証協力校等：大分市立吉野小学校

ESDの要素　多様性　有限性　連携性

能力／態度　批判　多面　協力

プログラムの概要

「木が、いかに暮らしの中に活用されているか、を学習し森林管理の大切さを学ぶ」ことをテーマとし、ワーキンググループから提案された「座学だけでなく体感できる授業を目指すべき」との意見を反映させ、

・木が人の暮らしに深く関わり、木を適正に管理・活用することが森林保全につながることを、校庭の木を通して学習する。
・子ども達は各自、校庭の木の中から1本好きな木を選び、その木について文献やインターネットなどを活用して事前学習をし、その後、講義や自然観察指導員の説明を聞いて理解を深める。
・校舎や家の中で木を活用しているものを探して記録したり、自ら木製のスプーンを制作して暮らしの中で利用する。
・学んだ知識を定着させるとともに情報を発信する方法として新聞をつくる。

といった体感できる授業を通して知識をより深めた。

プログラムの目標

①木が人の暮らしに深く関わっていることを知る。
②木を適正に活用することが、森や自然を守ることに貢献することを認識する。

①自然観察指導員の話しを熱心に聞く子どもたち
②初めての木製スプーン作り

プログラムの流れ

1時間目
　校庭の木を観察して、私の好きな木を決めよう
2・3時間目
　好きな木について調べよう
4時間目
　木でできているものを探そう
5時間目
　木と暮らしについて話を聞こう
6時間目
　木のスプーンをつくろう
7・8時間目
　校庭の木について話を聞こう
　好きな木にネームプレートを付けよう
9・10時間目
　学んだことを新聞にしよう

参加者の声

・木にはとてもたくさんの秘密があって、身近にある木もこんなことがあったんだということが心に残りました。
・大分の森を守るためには「木を植える、木を使う、手入れをする」ことが必要だと分かりました。

川から環境をかんがえよう

基にしたモデル的なプログラム：命の水–開発途上国の子どもの問題を「水」を通して学ぶ、川は自然の宝箱
作成団体：愛知国際理解教育ステーション（AIS）、多摩市立連光寺小学校
地域プログラム化メンバー：綾町照葉樹林文化推進専門監、南九州大学、ドリームトライ、多文化共生ネット九州、宮崎県地球温暖化防止活動推進センター、特定非営利活動法人宮崎文化本舗、一般社団法人てるはの森の会
実証協力校等：小林市立永久津小学校

宮崎県

ESDの要素　有限性　公平性　責任性

能力／態度　未来　多面　伝達　関連　参加

プログラムの概要

清流永久井野川と自然豊かな自分たちの環境について知り、世界の子ども達の水環境と比較する。自分たちの環境が当たり前の環境ではなく、世界には、水道の蛇口をひねればきれいな水を手軽に使える、恵まれた環境にいる子どもたちは少ないことを学習していく。最終的に恵まれた環境の永久津地区のきれいな水を守るために自分たちができることが何かを考え、調べたことを取りまとめ発表することで知識を定着させる。また、永久井野川の水質調査を行うことで水について一歩踏み込んだ学習とする。

①水を汲む子どもの写真をみて
②忍者のイラストやクイズを出しながら巻物にまとめて発表

プログラムの目標

①人と自然との関係を考えるきっかけとする。
②体験活動を通じて周りの自然に気づく。
③途上国の子どもの現状を知り、関心を持つ。
④自分の生活と関連付けて、今後の生活に生かす。
⑤学習した事を取りまとめ、アクションプランを作りあげる。

参加者の声

・わたしたちは平和だから水が使える。水を大切にしよう。（児童）
・最初は、どの国にもきれいな水があると思っていました。（児童）
・家ではマキでお風呂を沸かしている。山の木を伐り使いながら、川を守るのが良いと思う。（児童）
・学習内容をいろんな角度からとらえ、子供たち一人一人に考えを持たせることができたと思います。担任がする授業と違い、子供たちが自主的に活動したり考えを深めたりする場面が多くあり、とても新鮮でした。（先生）

プログラムの流れ

1・2時間目
地元の川を調査しよう！
宿題　感じたことをまとめてみよう
3時間目
世界の水事情について知ろう
4時間目
世界の水事情について知ろう
5時間目
ふりかえってみよう！
6・7時間目
きれいな水を守るためにはどうしたらよいか、調べてみよう
8時間目
発表し、皆で水の大切さを知ろう！

鹿児島県

山田クリーン作戦！

～地域の未来のためにどんな大人になりたいですか？～

基にしたモデル的なプログラム：学校周辺ごみ調査隊～地域の未来のためにどんな大人になりたいか～
作成団体：特定非営利活動法人くすの木自然館
地域プログラム化メンバー：特定非営利活動法人くすの木自然館、姶良市立山田小学校、霧島市立日当山小学校
実証協力校等：姶良市立山田小学校

ESDの要素　相互性　連携性　責任性

能力／態度　未来　協力　参加

プログラムの概要

学校周辺の「ゴミ拾い調査活動」を通して、地域の自然環境を再認識し、自己の関わりについて考えることで、道徳的・倫理的規範を身に付け、地域の担い手としての自覚と責任感を育む。

①地域への関心の喚起
　地域の自然や文化について知り、生活との関わりを認識する時間を持つ。

②地域実態調査活動
　学校周辺のごみを拾い、その量を知り分析する。

③地域環境計画の作成
　調査の結果を踏まえ、子どもたちの目線でごみを減らす対策を考え、地域に対して「自分達が今できること」を提案する。

④地域環境保全主体としての活動
　保護者や地域住民へ学習の成果を報告する。

プログラムの目標

①多様な自然環境に育まれた生物たちが生息する地域の自然環境を再認識し、人々の暮らしとの関わりを考える。

②地域を守る活動を行っている当事者から学ぶことで「自分たちの地域」に対する新たな気づきを得る。

③「自分たちが今できる事」を考え、当事者との協働的活動を通して、子ども達自身が実践する意欲とスキルを身に着け、「地域に住む者の一人」としての自覚や責任感を育てる。

①ごみを拾うだけでなく、記録をとり、どんなごみが多いか分析する
②「どうすればごみを捨てる人がいなくなるか」みんなで考える

プログラムの流れ

1・2時間目
【事前学習】学校周辺の環境を知ろう
3・4時間目
学校周辺のごみの現状を知ろう
5時間目
ごみの分析をしよう
6時間目
ごみが減る方法を考えよう
7時間目
地域の人に伝えよう

参加者の声

・いつも見ている風景なのに、ゴミ拾いをしてみるとたくさんあってびっくりしました。一番多かったのはタバコです。タバコは大人が吸うものです。私たちは絶対にゴミを『捨てる』大人にはなりません！『拾う』大人になります。（児童）

・自分達では専門的な知識が足らず、ここまでのプログラムはできなかった。専門的な外部の講師が入ることの重要性を感じた。（先生）

沖縄県

伊良部　シマの自然と文化

基にしたモデル的なプログラム：命の水-発展途上国の子どもの問題を「水」を通して学ぶ-、さまざまな視点から水について考えよう～水の総合学習プログラム～
作成団体：愛知国際理解教育ステーション（AIS）、教育開発研究会
地域プログラム化メンバー：宮古島市農林水産部水産課、宮古島市立伊良部中学校、宮古島市立南小型児童館、沖縄県立宮古青少年の家、特定非営利活動法人宮古島海の環境ネットワーク、特定非営利活動法人いけま福祉支援センター、一般財団法人沖縄県公衆衛生協会
実証協力校等：宮古島市立伊良部中学校、宮古島市立南小型児童館

ESDの要素　多様性　相互性　責任性

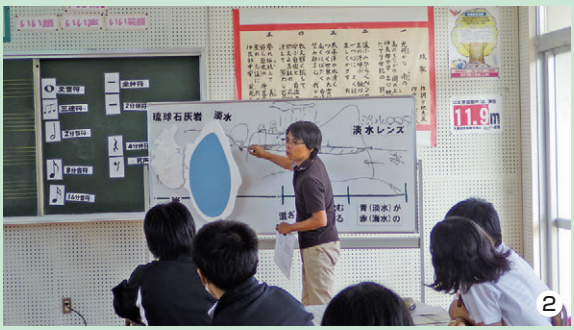
能力／態度　未来　多面

プログラムの概要

シマで古くから活用されていた魚垣〝カツ〟を取り上げ、昔の漁獲量と近年の漁獲量を比較し、水産資源の変化を知る。また、水産資源の変化からみるシマの環境の変化を予測する。また、話し合いから地下水の問題へ焦点を絞る。実験（琉球石灰岩の吸水実験、淡水レンズの実験）を通して、特徴的な伊良部島の地形、地質から地下水のできる仕組みを学ぶ。地下水の仕組みから、〝カツ〟が作られた場所の環境・構造を理解し、シマの持続可能な水のつきあい方を考える。

プログラムの目標

①魚垣からみるシマの環境の変化を理解し、変化の原因と過程の仮説を立てる。
②伊良部島の地形、地質の特徴を捉え、地下水のできる仕組みを学ぶ。
③地下水環境から持続可能な水との関わりを考える。
④自然環境と歴史文化の関係を「水」から学ぶ。



①３D模型を活用し、シマの地形を三次元で考える
②淡水レンズの仕組みにより地下水のたまる仕組みを学ぶ

参加者の声

・淡水レンズからあふれ出た水が伊良部島と下地島の間にたまってそこで様々な生き物が生きていること。
・今日学んだことを忘れずに伊良部島の地下水についてたくさんの人におしえていきたいと思います。
・離島地域において、地域を活性化させるための地域に根付いたプログラムは大切で、ESD事業はプログラム作り、人間関係を作る上で重要な役割を果たしていると思います。

プログラムの流れ

1時間目
魚垣「シマの知恵」を学ぼう
2時間目
伊良部島の水はどこからくる？―地下水のしくみ
3時間目
シマの知恵とシマの資源
4時間目
水質調査をしよう！
5時間目
フィールド調査
6時間目
水の汚れを考えよう

【索引】分野から検索

4つの分野		基にしたモデル的なESDプログラム名	掲載ページ
ともに生きる	①国際理解	動物になって考えよう！せかい・動物かんきょう会議ワールドカフェ	ー
		食べ物のムダをなくそう ～もったいない～から学ぶ平和教育プログラム	ー
		サモアから学ぶESD	ー
		干潟の生き物観察から世界を見よう！	48
		地球と人にやさしい服の選び方	ー
		ちがう国でも同じこと	22
		命の水　―開発途上国の子どもの問題を「水」を通して学ぶ―	62、70、72
		FOOD!　～食を通して世界とのつながりを考える～	44
	②社会参画	動物になって考えよう！せかい・動物かんきょう会議ワールドカフェ	ー
		「５つのものさし」で、地域の川や生きものを守っていく！～そして、自分の生活と関連づけて暮らしに生かす～	18、25、39
		みんなでつくろう！防災コミュニティファーム～まちなかの公園が地域を守る農園に！？～	61
		学校周辺ゴミ調査隊　– 地域の未来のためにどんな大人になりたいか –	71
		里山たんけん隊	9、13、28、36、43、46
		さまざまな視点から水について考えよう～水の総合学習プログラム～	10、36、72
		日本に古くから伝わる赤ちゃんのお世話で美しい地球を救おう	ー
		地域と共にゴミを減らす意識を持ち続けよう！「生ゴミワーストワン脱出大作戦」	ー
		食べ物のムダをなくそう ～もったいない～から学ぶ平和教育プログラム	ー
		目指せ！特級エコガイド～冬の校舎の秘密　劇的改造エコブリッジ　ビフォーアフター～	66
		これからのエネルギー生活を考えよう－電気に頼りすぎた生活を見直そう－	26、67
		自然の恵み(生態系ｻｰﾋﾞｽ)を活用する体験学習(いぐねの学校)	51、52
		森林プログラム(いなぎの森１００年プロジェクト)	43、69
		ホタルを通して里山環境を考える～中学生による生物多様性を考えた環境再生プログラム～	45
		サモアから学ぶESD	ー
		ふるさとのきれいな海を守ろう！	34、38
		地球と人にやさしい服の選び方	ー
		ちがう国でも同じこと	22
		力を合わせて絵本作家になろう！	ー
		「生き物たちとの持続可能な社会を考えよう」（自然調和型社会学習プログラム）	38、60
		命の水　―開発途上国の子どもの問題を「水」を通して学ぶ―	62、70、72
		地球温暖化を学び学校の省エネを考える「フィフティ・フィフティ」プロジェクト	23、27、53、67
		公園、探検・発見・ほっとけん！…誰が？	33、54
		川は自然の宝箱	35、46、70
		環境ウォッチングで提案づくり	24、29、36、55
	③健康	動物になって考えよう！せかい・動物かんきょう会議ワールドカフェ	ー
		食べ物のムダをなくそう ～もったいない～から学ぶ平和教育プログラム	ー
		くらしマイレージ講座	37、68
		赤とんぼを通して地域の良さを見つけよう	59
		環境ウォッチングで提案づくり	24、29、36、55
		FOOD!　～食を通して世界とのつながりを考える～	44
自然・生命	④生命	「５つのものさし」で、地域の川や生きものを守っていく！～そして、自分の生活と関連づけて暮らしに生かす～	18、25、39
		みんなでつくろう！防災コミュニティファーム～まちなかの公園が地域を守る農園に！？～	61
		日本に古くから伝わる赤ちゃんのお世話で美しい地球を救おう	ー
		地域と共にゴミを減らす意識を持ち続けよう！「生ゴミワーストワン脱出大作戦」	ー
		食べ物のムダをなくそう ～もったいない～から学ぶ平和教育プログラム	ー
		森林プログラム(いなぎの森１００年プロジェクト)	43、69
		くらしマイレージ講座	37、68
		地球の仲間たちの声を聞こう！	16
		赤とんぼを通して地域の良さを見つけよう	59
		ホタルを通して里山環境を考える～中学生による生物多様性を考えた環境再生プログラム～	45
		干潟の生き物観察から世界を見よう！	48

4つの分野		基にしたモデル的なESDプログラム名	掲載ページ
自然・生命	④生命	「生き物たちとの持続可能な社会を考えよう」（自然調和型社会学習プログラム）	38、60
		みどりなライフ！～みどりのカーテンで始めよう身近なエコ活動～	30
		木のパワーを探ろう！～使って守る森と住まい・まちの創造人材育成～	15、65、69
	⑤自然への愛着	「５つのものさし」で、地域の川や生きものを守っていく！～そして、自分の生活と関連づけて暮らしに生かす～	18、25、39
		里山たんけん隊	9、13、28、36、43、46
		学校周辺ゴミ調査隊　– 地域の未来のためにどんな大人になりたいか –	71
		日本に古くから伝わる赤ちゃんのお世話で美しい地球を救おう	ー
		自然の恵み(生態系ｻｰﾋﾞｽ)を活用する体験学習(いぐねの学校)	51、52
		森林プログラム(いなぎの森１００年プロジェクト)	43、69
		地球の仲間たちの声を聞こう！	16
		赤とんぼを通して地域の良さを見つけよう	59
		ホタルを通して里山環境を考える～中学生による生物多様性を考えた環境再生プログラム～	45
		干潟の生き物観察から世界を見よう！	48
		ふるさとのきれいな海を守ろう！	34、38
		力を合わせて絵本作家になろう！	ー
		公園、探検・発見・ほっとけん！…誰が？	33、54
		里山ビオトープから“いのちの輝き”伝えよう	ー
		エコシステム学習プログラム	69
	⑥生態系・生物多様性	「５つのものさし」で、地域の川や生きものを守っていく！～そして、自分の生活と関連づけて暮らしに生かす～	18、25、39
		里山たんけん隊	9、13、28、36、43、46
		自然の恵み(生態系ｻｰﾋﾞｽ)を活用する体験学習(いぐねの学校)	51、52
		森林プログラム(いなぎの森１００年プロジェクト)	43、69
		地球の仲間たちの声を聞こう！	16
		赤とんぼを通して地域の良さを見つけよう	59
		ホタルを通して里山環境を考える～中学生による生物多様性を考えた環境再生プログラム～	45
		サモアから学ぶESD	ー
		干潟の生き物観察から世界を見よう！	48
		力を合わせて絵本作家になろう！	ー
		「生き物たちとの持続可能な社会を考えよう」（自然調和型社会学習プログラム）	38、60
		里山ビオトープから“いのちの輝き”伝えよう	ー
		川は自然の宝箱	35、46、70
		エコシステム学習プログラム	69
		身近な自然と「水」と「生き物」のつながり	14、17、46、47、48
	⑦水	「５つのものさし」で、地域の川や生きものを守っていく！～そして、自分の生活と関連づけて暮らしに生かす～	18、25、39
		さまざまな視点から水について考えよう～水の総合学習プログラム～	10、36、72
		日本に古くから伝わる赤ちゃんのお世話で美しい地球を救おう	ー
		地球の仲間たちの声を聞こう！	16
		ホタルを通して里山環境を考える～中学生による生物多様性を考えた環境再生プログラム～	59
		干潟の生き物観察から世界を見よう！	48
		命の水　―開発途上国の子どもの問題を「水」を通して学ぶ―	62、70、72
		川は自然の宝箱	35、46、70
		身近な自然と「水」と「生き物」のつながり	14、17、46、47、48
	⑧大気	くらしマイレージ講座	37、68
		ホタルを通して里山環境を考える～中学生による生物多様性を考えた環境再生プログラム～	45
	⑨土	ホタルを通して里山環境を考える～中学生による生物多様性を考えた環境再生プログラム～	45
ごみ・資源	⑩公害・化学物質	サモアから学ぶESD	ー
		環境ウォッチングで提案づくり	24、29、36、55
	⑪３R	動物になって考えよう！せかい・動物かんきょう会議ワールドカフェ	ー
		「５つのものさし」で、地域の川や生きものを守っていく！～そして、自分の生活と関連づけて暮らしに生かす～	18、25、39
		学校周辺ゴミ調査隊　– 地域の未来のためにどんな大人になりたいか –	71
		日本に古くから伝わる赤ちゃんのお世話で美しい地球を救おう	ー

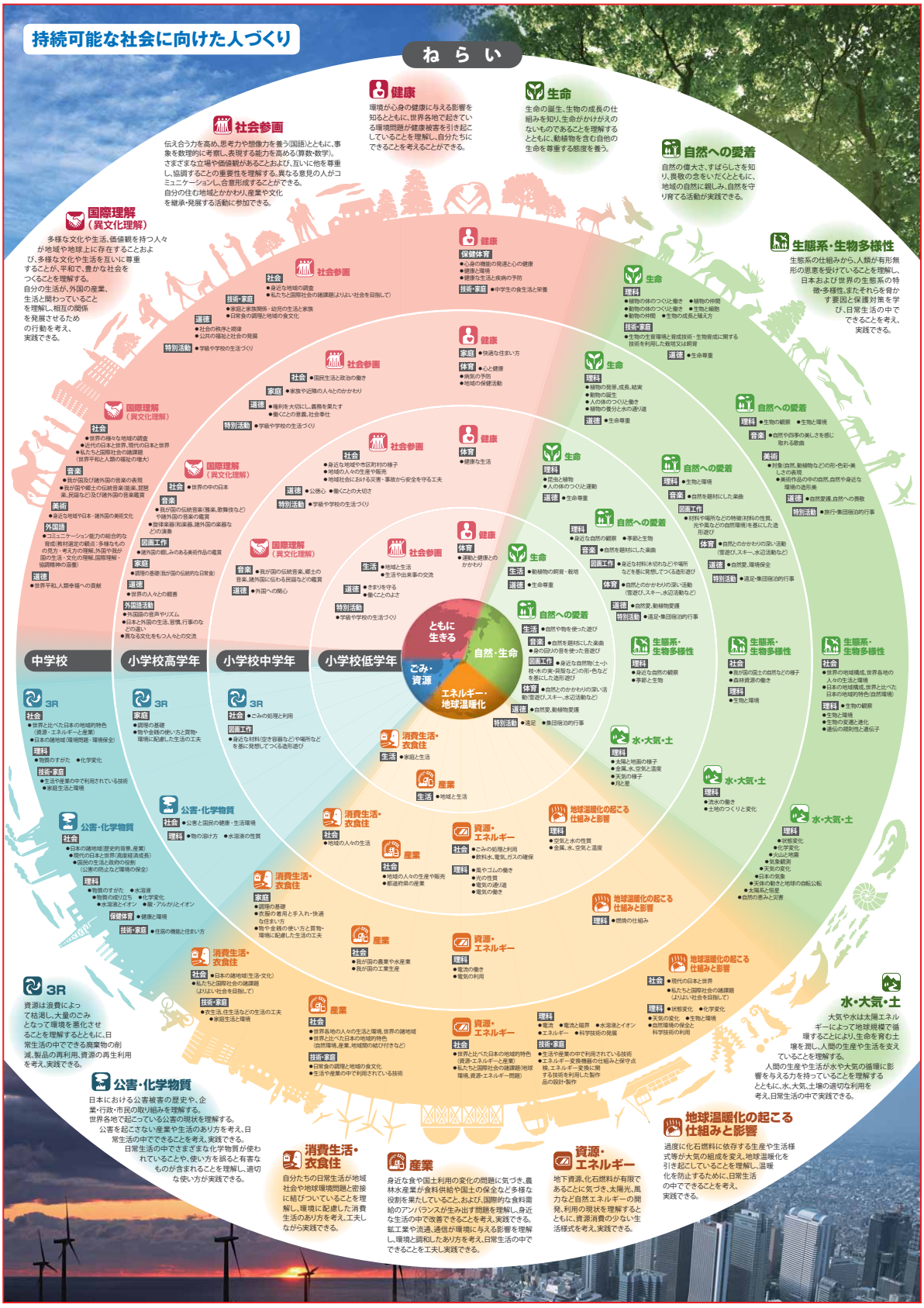
4つの分野		基にしたモデル的なESDプログラム名	掲載ページ
ごみ・資源	⑪３R	食べ物のムダをなくそう ～もったいない～から学ぶ平和教育プログラム	ー
		地域と共にゴミを減らす意識を持ち続けよう！「生ゴミワーストワン脱出大作戦」	ー
		自然の恵み(生態系ｻｰﾋﾞｽ)を活用する体験学習(いぐねの学校)	51、52
		地球の仲間たちの声を聞こう！	16
		干潟の生き物観察から世界を見よう！	48
		ふるさとのきれいな海を守ろう！	34、38
		ゴミ減らし大作戦～ゴミを減らすルールを作ろう！～	ー
		一人ひとりのエコが地球の未来を救う！～エネルギーと品物の一生を考えた品物の選び方・使い方・捨て方～	ー
		なたねプロジェクト見て食べて楽しんで！使った油はリサイクル	21
		レッツゴー！エコキッズ	67
エネルギー・地球温暖化	⑫地球温暖化の起こるしくみと影響	森林プログラム(いなぎの森１００年プロジェクト)	43、69
		くらしマイレージ講座	37、68
		一人ひとりのエコが地球の未来を救う！～エネルギーと品物の一生を考えた品物の選び方・使い方・捨て方～	ー
		地球温暖化を学び学校の省エネを考える「フィフティ・フィフティ」プロジェクト	23、27、53、67
	⑬資源・エネルギー	学校周辺ゴミ調査隊　– 地域の未来のためにどんな大人になりたいか –	71
		目指せ！特級エコガイド～冬の校舎の秘密　劇的改造エコブリッジ　ビフォーアフター～	66
		これからのエネルギー生活を考えよう－電気に頼りすぎた生活を見直そう－	26、67
		くらしマイレージ講座	37、68
		地球の仲間たちの声を聞こう！	16
		ホタルを通して里山環境を考える～中学生による生物多様性を考えた環境再生プログラム～	45
		サモアから学ぶESD	ー
		ふるさとのきれいな海を守ろう！	34、38
		ゴミ減らし大作戦～ゴミを減らすルールを作ろう！～	ー
		地球温暖化を学び学校の省エネを考える「フィフティ・フィフティ」プロジェクト	23、27、53、67
		レッツゴー！エコキッズ	67
	⑭産業	これからのエネルギー生活を考えよう－電気に頼りすぎた生活を見直そう－	26、67
		地球と人にやさしい服の選び方	ー
		なたねプロジェクト見て食べて楽しんで！使った油はリサイクル	21
		木のパワーを探ろう！～使って守る森と住まい・まちの創造人材育成～	15、65、69
		FOOD!　～食を通して世界とのつながりを考える～	44
	⑮消費生活・衣食住	動物になって考えよう！せかい・動物かんきょう会議ワールドカフェ	ー
		学校周辺ゴミ調査隊　– 地域の未来のためにどんな大人になりたいか –	71
		日本に古くから伝わる赤ちゃんのお世話で美しい地球を救おう	ー
		地域と共にゴミを減らす意識を持ち続けよう！「生ゴミワーストワン脱出大作戦」	ー
		食べ物のムダをなくそう ～もったいない～から学ぶ平和教育プログラム	ー
		目指せ！特級エコガイド～冬の校舎の秘密　劇的改造エコブリッジ　ビフォーアフター～	66
		これからのエネルギー生活を考えよう－電気に頼りすぎた生活を見直そう－	26、67
		自然の恵み(生態系ｻｰﾋﾞｽ)を活用する体験学習(いぐねの学校)	51、52
		くらしマイレージ講座	37、68
		サモアから学ぶESD	ー
		地球と人にやさしい服の選び方	ー
		ちがう国でも同じこと	22
		ゴミ減らし大作戦～ゴミを減らすルールを作ろう！～	ー
		命の水　―開発途上国の子どもの問題を「水」を通して学ぶ―	62、70、72
		一人ひとりのエコが地球の未来を救う！～エネルギーと品物の一生を考えた品物の選び方・使い方・捨て方～	ー
		地球温暖化を学び学校の省エネを考える「フィフティ・フィフティ」プロジェクト	23、27、53、67
		みどりなライフ！～みどりのカーテンで始めよう身近なエコ活動～	30
		なたねプロジェクト見て食べて楽しんで！使った油はリサイクル	21
		木のパワーを探ろう！～使って守る森と住まい・まちの創造人材育成～	15、65、69
		レッツゴー！エコキッズ	67
		FOOD!　～食を通して世界とのつながりを考える～	44

【索引】対象から検索

対象	都道府県	モデル的なESDプログラム名	掲載ページ
中学校	青森	森の恵みに育まれた町　～青森ひば(ヒノキアスナロ)の一生～	13
	福井	総合的な学習の時間ふるさと敦賀塾スペシャルセミナー 「100年後の敦賀で世界遺産候補は何か」	35
	長野	地域の自然を見つめよう	36
	和歌山	私たちのみはまの海を考える	48
	広島	このまちにくらしたいプロジェクト	54
	香川	山・里・まちのつながりから未来を考えよう　～善通寺弘田川調査からわかること～	60
	徳島	暮らしの中の水を見つめ直そう～アフリカから学ぶ、ふるさとの安全な水と豊かさ～	62
	熊本	くらしマイレージ講座	68
	沖縄	伊良部　シマの自然と文化	72
小学校高学年	北海道	水から学び、みずから考える私たちのまち	10
	青森	森の恵みに育まれた町　～青森ひば(ヒノキアスナロ)の一生～	13
	岩手	身近な自然と「水」と「生き物」のつながり	14
	宮城	木のパワーを探ろう！ ～使って守る川崎の森と暮らしと未来～	15
	秋田	地球の仲間とつながろう　森の人「オランウータン」と一緒に生きる喜びを！	16
	山形	サクラマスを育む川～鮭川のレシピ～	17
	茨城	なたねプロジェクト　～タネは命の循環～	21
	栃木	ちがう国でも同じこと　～モンゴルと日本の暮らしを比べてみよう～	22
	群馬	太陽エネルギーって何だろう？　～太陽の力でごはんができる～	23
	千葉	ほんとうにきれい？　～長南の水から考えるわたしたちの未来～	25
	東京	新しいエネルギーを考えよう ～考え、話し合い、体験し、新しいエネルギーについての考えを発信する～	26
	神奈川	地球温暖化・気候変動への理解と緩和策を考える	27
	新潟	通船川プロジェクト	28
	山梨	清里の自然（学校林）を知ろう！	29
	石川	つながりに気づく、つながりを築く～ふるさと伏見川を守り続けるためには～	34
	岐阜	人にやさしく　自然にやさしく～環境といのち～	37
	滋賀	見つけて、考えて、つなぐ猪子山学習	43
	京都	「歩くまち京都」学習	44
	大阪	魚庭（なにわ）の海を知って、アマモを育てよう大作戦！	45
	奈良	佐保に生きる～ビオトープを育てる	47
	岡山	地球環境プロジェクト～考えよう！地球のあした、行動しよう！身近なところから～	53
	山口	これからのまちとくらしを考える子どもワークショップ	55
	高知	アサギマダラの飛来する魅力ある地域づくり	59
	福岡	地球救命隊　～守れ!!日本の森林! ～	65
	佐賀	私たちの新校舎：コミュニティ・ルームをもとに北川副町について考えよう	66
	長崎	環境問題と生活のつながりを知り、科学技術で未来をひらこう！	67
	大分	校庭の木から学ぶ、木と人の暮らし	69
	鹿児島	山田クリーン作戦！～地域の未来のためにどんな大人になりたいですか？～	71
小学校中学年	北海道	カメラと探検～探して、伝える、ぼくらの宝！～	9
	福島	山と海をつなぐ川を調べ、自然と人とのかかわりを考えよう	18
	栃木	ちがう国でも同じこと　～モンゴルと日本の暮らしを比べてみよう～	22
	埼玉	ぼく、わたしはアースレンジャー	24
	静岡	緑のカーテンからはじめよう　～私たちの暮らしと太陽エネルギー～	30
	愛知	季節と堀川の生物	38
	三重	水辺の環境調査	39
	京都	「歩くまち京都」学習	44
	兵庫	遠阪川博士になろう！	46
	鳥取	里山の恵みと暮らしを伝えよう！	51
	島根	昔ながらの暮らしから考える私たちの暮らし	52
	宮崎	川から環境をかんがえよう	70
小学校低学年	富山	生活科　市電通りのたからを見つけよう	33
	京都	「歩くまち京都」学習	44
	愛媛	よいまちつくろう～菜の花プロジェクト～	61

解説【5】ひとめでわかる学年別・教科別ガイド

指導要領に沿って、4つの環境分野・13のサブテーマ・４つの発達段階別に整理しました。このマンダラ（ESDの世界観を表した地図）を放射状にたどり、学習内容に沿った分野、サブテーマと教科、学年を選んでください。



環境省「授業に活かす環境教育－ひとめでわかる学年別・教科別ガイドー」より

平成26年度　持続可能な地域づくりを担う人材育成事業
地域版ESD環境教育プログラムガイドブック
平成27年3月発行

平成26年度 環境省「持続可能な地域づくりを担う人材育成事業」全国事務局
地球環境パートナーシッププラザ（GEOC）
〒150-0001　東京都渋谷区神宮前5-53-70　国連大学ビル1F
TEL：03-3407-8107 ／ FAX：03-3407-8164
開館時間：10:00 ～ 18:00（土曜日は17:00まで）

リサイクル適正の表示：印刷用の紙にリサイクルできます
この印刷物は、グリーン購入法に基づく基本方針における「印刷」に係る判断の基準にしたがい、
印刷用紙へのリサイクルに適した材料［A ランク］のみを用いて作製しています。

GREEN PRINTING JFPI
P-810172
この印刷製品は、環境に配慮した
資材と工場で製造されています。

VOC FREE T&K